

弥陀同体異名。極樂密嚴名異一處。

(興教大師全集・一)

と云へるに由つて、之れを觀るべく、又其の「秘釋」の跋文に、

抑記「此秘釋後入三摩地。忽然化現寶生房云。崑崙一度崩金石即一物。毘弥兩觀凡聖無二。吾是金色世界古衆。汝亦密嚴淨土新入。若入此勝蘭林。誰人有異薰哉。」

(興教大師全集・四六)

と云へるに見るも、興教大師の真意は凡聖不二、即身成佛の宗義を説き玉ふものなること、高祖大師と更に異なることなきを知るべきである。又、興教大師の「密嚴淨土略觀」に

蔓願行淺弱機未熟。且安應化淨土。次迎法性妙國。應時超九界迷因。即身開三密之佛果。

(興教大師全集・五七)

と説かれたのも、其の「且安應化淨土」と云ふは、諸天修羅宮等一門の悉地を表はし、「次迎法性之妙國」と云ふは、普門の悉地を明されたものであつて、共に一生成佛の悉地を明されたものと見るべきである。

### 第五節 草木成佛

凡そ佛教の因果説から言へば自業自得即ち自己創造であつて、宇宙萬法を以つて、吾人衆生の業力所感と爲すが故に、吾人有情があつて、始めて、天地森羅の萬象を生ずるものとするのである。即ち吾人有情の外に、別に



六大法身の存在を認めないのが、真言宗の根本教相であると共に、又以つて佛教の根本教理である。

由來佛教は、吾人衆生の迷妄を轉じて、覺悟を開かしめんが爲めに、説かれたるものであるからして、有情を以て主とし、山河大地草木瓦石等の非情を以つて一往は客と観るけれども、然も諸法無我を説いて、個性的小我を止揚し、天地萬有を悉く自我の内に包容する所の、大我に体達するを、根本義とするが故に、自ら自己を局限し、我を以つて宇宙の一微分子と考ふるが如きは、凡夫の我執であつて、我即ち宇宙なり、衆生即ち佛陀なりと、達觀するを菩提と云ひ、此の眞智を体得せる者を佛陀と稱するのである。

彼の『中陰經』の所説と稱せらるる

一佛成道。觀見法界。草木國土。悉皆成佛。

と云る文の意は、非情の草木國土をもつて、有情の体の一部分と見ての成佛を云ふに外ならないのである。又『即身成佛義』に

器世界者表所依土。此器界者三摩耶曼荼羅之總名也。

(全集洋・一五〇)

と釋し又、

諸顯教中。以四大等爲非情。密教則説此爲如來三昧耶身。

(全集洋・一五一)

と説かれて、器世界即ち草木國土及び地水火風等の色法を以つて、如來の懷幟と見、佛身の一部と觀られたの



は、此等の非情にも成佛あることを示さんが爲めではなく、これを以つて、人格身の延長としての六大法身、即ち宇宙大の人格を示さんが爲めであつて、畢竟吾人の色心は、共に法界に周遍する、六大法身なる事を示せるものと見るべく、彼の鉄眼禪師の『假名法語』に

地水火風は、もとより地水火風にあらず。法身真如の妙體なるを、二乗と凡夫とはまよひて、地水火風とおもへり。もし地水火風、本より佛なる事を悟ぬれば、我が此の身、はじめより法身なるのみならず、天地虚空森羅萬象に至る迄、みな悉く法身の妙體なり。此のさとりひのひらけし時を、諸法實相とも云ひ、草木國土悉皆成佛ともいへり。草木國土のみにあらず、虚空に

至る迄法身の體なるを、まよひて虚空とおもへり。此のさとりひのひらくる時、虚空とおもひしもきえて、萬法一如のさとりとなる。

と云へるも、吾人の外に天地の森羅萬象はなく、天地即ち我なり、當相即ち佛なりと、体験せる上の説明である。換言すれば、有限の姿に現はるる、自我の本性の無限を意識し、自我が天地の中に止揚せられた境地を、草木成佛と云ふのである。

然るに、中古以來、真言宗の學徒、非情の草木そのものにも、自ら発心修行あり、菩提涅槃の義ありと説き、草木成佛を以つて、真言宗不共の教義と爲すが如きは、是れ六大縁起論を誤解せるより起りし、戲論なりと謂ふ



べきであらう。

### 第六節 頓覺人證

真言の宗義が、即身成佛を以つて、根本基調とするこ  
とは、既に述べた通りである。即身成佛とは、吾人凡夫  
が、その儘、本來佛陀なることを自覺し、現世一世に於  
て、速かに佛智を修證することである。然らば何人が、  
此の父母所生の肉身を轉ぜずして、大覺位を實證したか、  
即身頓覺の人證は、果して誰であるかと云ふに、真言宗  
に於ては、先づ以つて、金剛薩埵 (Vajrasattva) を擧げ  
るのである。金剛薩埵とは、一切義成就菩薩即ち悉達太  
子であつて、つまり、釋尊を以つて、即身成佛の實現者  
たる、三世常住淨妙法身たる、大日如來と觀るのである。

此の釋尊を以つて、頓覺人證となすに就て、賴瑜僧正

は、その『即身成佛義顯得鈔』卷下へ「真言宗全書、即身  
義顯得鈔六七頁」に委しく釋されてゐる。今その要を述べ  
れば、先づ『雜問答』に依つて、高祖大師は金剛薩埵を  
頓成の證とせられたることを示し、一切義成就菩薩が、  
此の金剛薩埵と同人なることは、『理趣經』初段の「一  
切義成就金剛手菩薩摩訶薩」の文が、明鏡であるとなし、

『理趣釋經』の

一切義成就者。普賢菩薩異名也。金剛手菩薩摩訶薩者。  
此菩薩本是普賢。從毘盧遮那佛。二手掌親授五智金剛  
杵。即與灌頂。名之爲金剛手。云云

（縮藏・問・八・六右）



と説ける文を引いて、其の義を明かにし、更らに、その一切義成就菩薩は、釋迦佛因位の名稱であつて、釋迦佛は三大阿僧祇劫の間修行の後、始めて成道せられた如來であり、又三乘一乘俱に教主と仰ぎ、權實二教同じく、能化の尊と崇むるのに、今この釋迦佛を以つて、即身成佛の人證とするのは、彼の天台・華嚴に、四教五教を立てて、その教主は異つても、同じく釋迦一佛の上の機見の不同と見ると等しく、真言の機に望むるときは、釋迦佛を即身頓覺の人と観るのであると論じ、『教王經』第一に、

爾時一切如來雲集。於一切義成就菩薩摩訶薩。坐菩提道場。徃詣示現受用身。咸作是言。善男子云何證無上

正等菩提。不知一切如來眞實忍諸苦行。時一切義成就菩薩摩訶薩。由一切如來警覺。即從阿娑頗那伽三摩地(Asapharivāsa-samādhi)起。禮一切如來。白言。世尊如來教示我。云何修行。云何是眞實。如是說已。一切如來異口同音。告彼菩薩言。善男子當住觀察自心三摩地。

(縮藏・閏二・二右)

と説き、次に廣く五相成身觀を開示せる文段の一部と、  
菩提心論の三摩地段に  
如金剛頂瑜伽經說。一切義成就菩薩。初坐金剛座取證無上道。遂蒙諸佛授此心地。然能證果。凡今之人若心決定如教修行。不起于座三摩地現前。應於是成就本尊



之身

(縮載・閏一。一。九)

と明せる文とを、誠證とされてある。この瑜公の説に依つて、釋尊が直往頓覺の人證たること、一點疑ふ要はないのである。

抑も釋尊の三劫成佛説なるものは、無数劫の長い間に亘つて、無量の修行を重ね、廣大の功德を積まねば、眞實の悟りは成就せぬと考へてゐた、婆羅門教徒に對する善巧方便に過ぎぬのであつて、眞言密教から云へば、釋尊も亦、今を去ること約二千五百年の昔、中印度迦毘羅城主、淨飯王の王子、悉達(Siddharta)太子として、誕生せられ、十九歳出家、入山學道五年、南林苦行六年

の後、三十歳にして、伽耶(Gaya)の菩提道場に於て、密佛の警覺を蒙つて、豁然として大悟せられた。これが即身頓成の實證に外ならぬのである。故に即身成佛こそ、釋尊の眞精神に還つたものと言ふべきである。仍つて吾人眞言行者も亦この釋尊の芳躅を鑽仰して、現世一生に於て、即身に成佛を実現せんと努力すべきであつて、それが高祖大師立教の眞言密宗の理想であり、目的である。然るにこの高祖大師の新宗義闡立に對しては、當時専ら、三劫成佛を説ける教界の、容易に信ずる所とならず、各宗の學匠との間にも、幾多の論議が交へられたことなるべく、遂に彼の清凉殿の八宗論に於て、高祖大師が親しく、即身成佛の奇瑞を現はされたと云ふ、説話を生むに



至つたのである。

八宗論のことは、古く真寂親王の撰と稱せらるゝ、  
孔雀經音義<sup>四</sup>に見え、其の後興教大師は「五輪九字秘釋<sup>四</sup>  
にその説を承けて

嵯峨天皇仰云。真言宗即身成佛其證何在。謹惶弟子入  
五藏三摩地觀。忽然於出家頭上現五智寶冠。於肉身五  
體放五智光明。當爾之時一人起席萬民作禮。諸宗靡旗  
皇后送衣。

と述べてある。八宗論のことはこの外諸書に載せてある  
が、その事の行はれた年時、並に集會の人物等、諸説區  
々であり、その表現形式も、常識を起えて、著しく神秘  
的である所から、真偽の程も云爲されてはゐるが、これ

を以つて、高祖大師の宗教體驗の内容を、神韻縹渺たる、  
象徴的文字に依つて、表現せるものと観て、文底に流る  
る、宗教的生命を把握せねばならぬものであらうと考へ  
る。

而して又景實師は「大日經疏鈔<sup>四</sup>に、興教大師を擧げ  
て、高祖大師以降に即身成佛された、密嚴淨土の新人で  
あると云はれてゐる。興教大師も、「五輪九字秘釋<sup>四</sup>に  
三藏云。余依金剛智三藏傳此五字。起信修之及干日  
於秋夜滿月。忽然而得除蓋障三昧。」云々

因茲弟子得聞此秘訣。深信、多年修之得初位三昧。有  
信禪徒勿生疑惑。若虛言修之知自。唯願勿令一生空  
過。

（興教大師全集・一四）



と述べられて、自らその除蓋障三昧を得られたことを、  
示してゐられるのである。その他攀げ來れば、即身頓成  
の人證は、其の數尠くはないことであらうが、大聖釋尊  
にせよ、高祖大師にせよ、果た亦 興教大師にせよ、一  
度成碑せられた人と虽も、外面的には、何等吾人凡夫と  
変る所はないのであつて、佛陀としての基調は、内面的  
生活即ち、精神生活にあるのである。凡夫が佛と成つた  
と云つても、それは精神生活の一大轉向である。釋尊の  
降魔成道によつて、一轉回した世界觀は、我は天地と一  
体であると云ふ、大自覺であつて、最も麗しく円融無碍  
の世界觀を展開されたのである。これが即ち大日如來の  
境地である。この大日如來は、吾人凡夫の心中にも、在

るのであるが、未だ開顯されないのである。苟くも自心  
の實相を知見し、本尊の三密を用として、教の如く修行  
し、本尊と行者と入我我入の三昧に住する者は、假令釋  
尊の如き、又は高祖大師の如き、或は興教大師の如き、  
上品の悉地は得られざる迄も、一分の即身成佛を体験し  
て、密嚴界裡の新人たり得るものと信すべきである。勿  
論その自覺修證の階程如何によつて、解脱者の性格、風  
光に大なる相違を來すのは、當然のことであるから、吾  
人は日夜に精進して、自己並社會國家の淨化に努めねば  
ならぬのである。



## 第七章 佛身建立

### 第一節 序 説

成佛を以て、終局の理想とし、目的とする、佛教に在つては、佛陀佛身の問題は、最も重要な意義を有するのである。殊に真言密教に至つては、佛身の表現に、終始するものとも称せられ、其の所立の曼荼羅よりすれば、三世十方法界の諸尊皆是れ法身大日如來の変現であつて、諸尊皆同毘盧遮那佛身なりと説くと雖も、此の多佛統一説と共に、又一佛多身説ありて、其の佛身建立に就ても、經軌に依り一身・二身・三身・四身・五身等重々の異説がある。

一身建立とは、唯一法界 (*Dharma-dhātu*) の尊たる、



本地法身毘盧那如來を以つて、無量の佛身の、根本總体とする説である。

二身建立とは、是れに唯密の二身説と、顯密合論の二身説とがある。高祖大師の『廣付法傳』卷一に法身と智身とを以つて、無量の佛身を攝するが如きは、前者に属する。此の中法身は、理法身であつて胎藏界の大日、智身は智法身に於て金剛界の大日である。又『守護經』第九に、法身毘盧遮那佛と、菩提樹下成道の、生身釋迦牟尼佛とを説き、又『智度論』第九等に、法性身と父母生身と若くは法身と化身とを説くが如きは、後者に属すと見るべきである。

三身建立にも、唯密の三身説と、顯密合論の三身説と

がある。『大日經』卷六に依りて建てる、法身、受用身、變化身の三身説の如きは前者に属し、又『聖位經』及び『楞伽經』第二等に説く、法報應化三身の如きは後者に属する。即ち法身は密、報應二身を顯とするのである。此等の三身は、佛教に於ける佛身建立の中樞をなすものであつて、他の佛身説は、畢竟此の三身説の布演、若しくは總括と謂ふべきである。

四身建立は『瑜祇經』、『大日經』等に説く、自性・受用・變化・等流の四種法身説であつて、唯密不共の佛身説とする。

五身建立は興教大師の『五輪九字秘釋』に案立する所にして、前の四種法身に法界身を加へたるものである。



法界身とは六大法身 (Sainmahābhūta-āhārānīkāya) に  
して、中台大日如來を指すのである。

以上種々の佛身建立ありと雖も、真言宗に於て普通用  
ふるは、顯密合論の三身と、四種法身として、今此の  
二種の佛身説に就て、次に其の概要を述べることにする。

### 第二節 顯密合論の三身

凡そ大乘佛敎に於ては、小乘敎の如く、佛を釋迦一佛  
に局ることなく、十方三世に無量の佛あり、その佛身に  
應身と報身と法身との三身 (Trayaḥ-kāya) を具足すと立  
てるのである。

先づ應身とは、今を去ること約二千五百年の昔、中印  
度迦毘羅衛城 (Kapilavastu) の嵐毘尼 (Sumbhū) 園中、無

憂樹 (Ashoka) の下に、浮飯 (Suddhodhana) 大王を父と  
し、摩那 (Māyā) 夫人を母とし、其の長子悉達多 (Siddh-  
hastā) 太子として、誕生せられ、夙に老病死の苦を觀じ  
て、十九歳出家、三十歳にして、佛陀伽耶 (Buddha-gaya)  
の菩提樹下に、豁然として成道、五十年轉法輪 (Dharmā-  
cakāra-pravṛttau) の後、拘尸那揭羅 (Kūśinagara) 城  
外、二雙の沙羅 (Śāla) 樹の間に八十歳を一期として無餘  
涅槃に入られた、歴史上の釋迦牟尼 (Śākyamuni) 佛を  
云ふものにして、此の應身の説ける法門を小乘敎並に大  
乘中の二乘敎とする。應身は所化の衆生の、機欲に應同  
して、化現せる佛身なるが故に、應身又は化身 (Nirmāna-  
kāya) と云ふ。應身は終生的化現の身に名づけ、化身



は暫生的化現の身に名づく、何れも權化の身なるを以て時に合して應化身若くは變化身とも稱するのである。即ち迹門の佛である。

次に報身 (*Vipakā-k.*) とは、現實の歴史佛陀を、理想化したものであつて、釋尊の眞身であり、本門の佛である。此の佛身は『法華經』に説く、五百塵點劫の昔、已に成佛せる佛身にして、又『華嚴經』に説く、十身具足の佛身である。此の佛身は、因位にあつて、五百本生等の如き、多劫の間、諸善萬行の努力の報酬として、感得せる無遍の相好、無量の壽命を具せる、悲智圓滿の佛身であつて、此の報身の説ける法門を、『法華經』、『華嚴經』等の顯教の一乘教とする。此の報身は、又受用身 (*Sambhoga-k.*) と云ひ、是れを分つて、自受用身と他受用身との二つとする。佛自身の爲の身相と、他の菩薩の爲めの身相との二つである。但し一般の二乘凡夫等の爲めに現する色身は應身である。

次に法身 (*Dharma-k.*) とは、法即ち眞如 (*Tathata*)、或は諸法實相 (*Dharmata*) と謂はる、所の、佛の理想を具現したる身であつて、無始無終、三世常住、周遍法界の佛身である。即ち此の法身は、又法性身或は法界身とも名づけ、個性を超え、宇宙萬有と、平等の体性を有するものであると共に、而も宇宙萬有のものには非らずして、萬法如実の相を覺知し、宇宙大の人格となれる、三密莊嚴の法身であつて、理の世界を智の世界に包容し



たる、理智不二の大覺位を、法身と名づくるものである。謂ふ所の三密莊嚴の法身とは、宇宙間の一切の形色は悉く佛の身密、一切の音聲は悉く佛の語密、一切の諦理は悉く佛の意密であつて、其の身語意の三密は、一々に遍一切の実相を具すると共に、又三密相互にも相即攝入の平等相を示す、法界周遍の法身であつて、此処に高祖大師の所謂「法身說法」の説を生ずるに至るのである。

以上の如く三身を建つると雖も、是れ畢竟、一佛上の佛身觀の相違に外ならずして、一釋迦佛を以つて、歴史的に八十老比丘の相を現じて入滅せられた、有始有終の史的佛陀と見て、之れを應身と呼び、又此の老比丘を理想化し、体に辺際なく、壽に限量なき有始無終の超人間

的佛陀と見て、之れを報身と称し、更に不生不滅即ち無始無終の絶対真理の、具象的顯現と見て、之れを法身と名づけたるものである。

### 第三節 四種法身

自性・受用・變化・等流の四種法身の中、先づ第一に、自性

法身 (*Svabhāva-dharmaśarīra*) とは、諸佛の真身であつて、其の身相無辺にして、虚空の如く、一切處に遍じ、三世常恒にして、自性所成の眷屬と共に、自受法樂の爲めに、三密の法門を説かれた。此の自性身に理法身と智法身との別があつて、理法身は阿字不生、六大無礙の理徳を表とする、本有本覺の法身であつて、普通に云ふ、自性法身とは、此の理法身を指すのである。智法身は、



理に冥合せる智徳を表とする。修生始覺の法身である。此の理智二法身は、阿毘曇茶羅の上では、理法身は胎藏法中台八葉の中尊、法界定印 (*Dharmadhātū - dhyaṇa - mudrā*) の大日如來とし、智法身は金剛界成身會の中尊、智拳印 (*prajñā mudrā - mudrā*) の大日如來とする。此の理智二法身は、次での如く大日金剛阿部大經の教主とする。而も此の理智二法身は別体あるのではなく、一法身の両面であつて、諸法實相の理に住するを理法身と云ひ、生佛一如の智に住するを智法身と称するに外ならぬ。智は能證の心にして、理は所證の境である。此の境智を泯亡して、不二一体に飯入せるを、法身自證 (*dharmasvāya*) の極位とするのである。理法身が、三重曼荼羅を流現して、

三密平等の法門を説かれる有様を現したのが、胎藏法曼荼羅にして、智法身が、從心流出の三十六尊等に對して、未來世の衆生を救済せよと教勅を與へられた場面を示したのが、金剛界曼荼羅である。

第二に受用法身とは、之れに亦自受用法身 (*svasamīkhyā*

*- dharmā - k.*) と、他受用法身 (*parasamīkhyā - dharmā - k.*)

との別がある。自受用法身は、理智相應し、自ら廣大の法樂を受くる佛身であつて、此の自受用法身と、前の智法身とは全く同一位の佛身である。他受用法身とは、他の初地以上の諸大菩薩の爲めに、尊特高大無盡莊嚴の身を現じて、真言道句の法を宣説して法樂を受用せしむる佛身であつて、西方淨土の阿彌陀佛の如きは、是れに當



るのである。他受用の語は変化・等流の二身にも通ずるけれども今は他受用の初めなるを以つて、特に此の名を附するのであると云ふ。

第三に変化法身 (*Nirmanā-dharma-k*) とは、十地前の未登地の諸の菩薩並に二乘・異生の爲めに丈六三十二相等の形相を変現化作して、加持世界に於て種々の密教を説き、之れを攝化する佛身にして、釋迦牟尼佛の如き是れに當る。

第四に等流法身 (*Viśvayāna-dharma-k*) とは六道九界の衆生を度せんが爲めに、其の機根性欲に應じ、或は普賢・文殊・觀音・弥勒、或は聲聞・緣覺、或は人天鬼畜等の身相を流現し、彼等の言音に同じて、真言道句の法を宣説し、

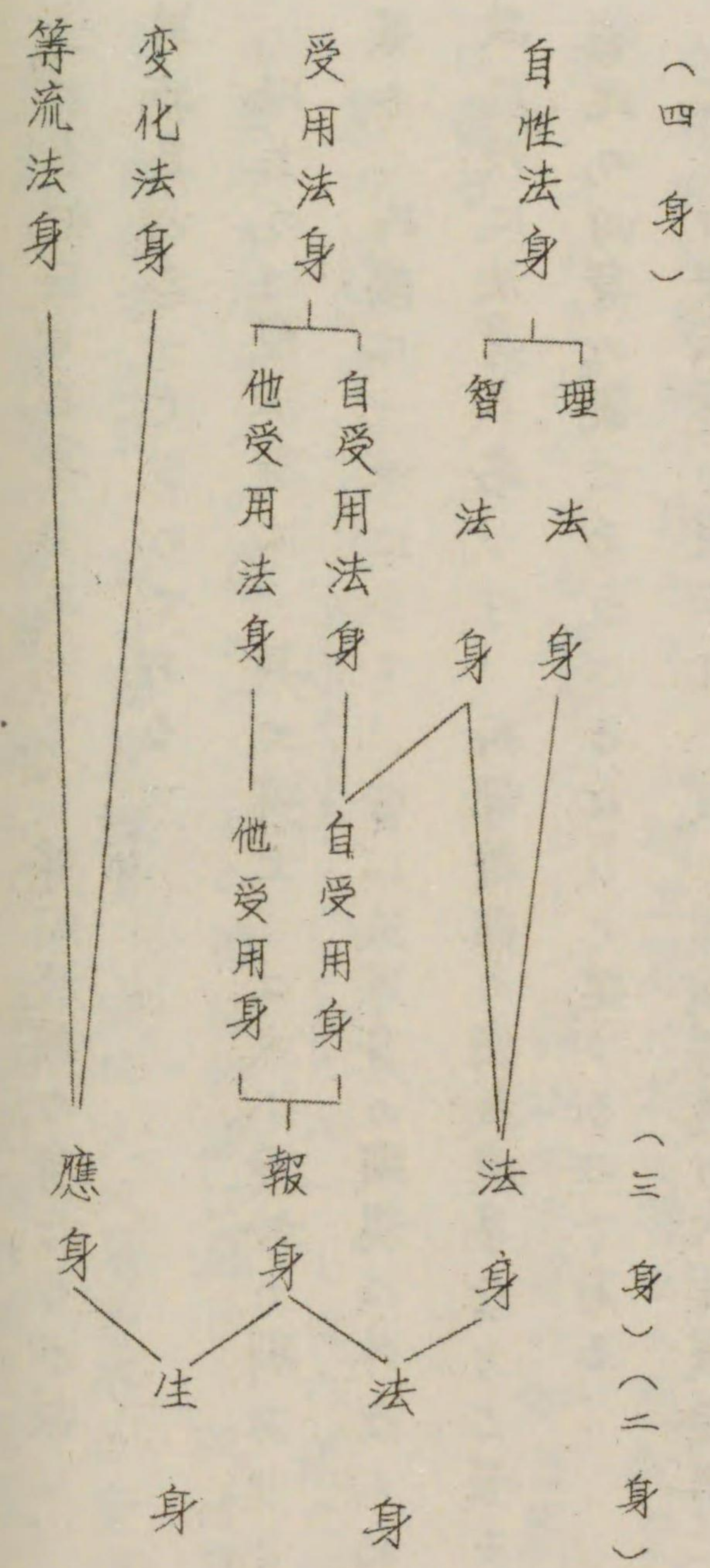
之れを促益する身であつて、等同流類の身なるが故に、等流身と名づくるのである。

以上の四種法身は、其の身土には大小廉妙の別ありと雖も、内證は一味にして、皆一法界身の顯現に外ならぬ故に共に法身と名づけ、純部雜部の密教廣多なりと雖も、皆此の四身の説にあらざるなしと建つるのである。

此の四種法身の建立は、彼の龍樹菩薩の大智度論等に見ゆる、生法二身又は法化二身の思想が無着・世親二菩薩に至りて、法報應の三身説、若くは自性・受用・變化の三身説となり、更に護法菩薩に至りて、受用身を自受用・他受用の二身に分ち、別に雜類身又は等流身を加へて、かくして遂に真言密教の四種法身説となれるものである。



而して、金胎両部曼荼羅に於ける諸尊は、悉く此の四種法身に統攝せられ、四種法身は更に大日如來の一法界身 (Dharmadhātu - kāya) に皈着すと観るのが真言密教の特色である。今四種法身と三身及び二身との關係を圖示すれば次の如くである。



第四節 大釋同異

抑も佛教の源は、釋迦一佛より出づること、勿論である。然るに、真言密宗に於ては、釋迦佛を以つて、顕教の教主なりとし、別に大日如來を立てて、密教の教主と云ふ。然らば、此の大日と釋迦と、二佛の同異如何とは、古來の異説であるが、真言密教の教主大日如來とは、其の實、淨飯大王の王子悉達太子、即ち一切義成就菩薩が、法身大日如來を契證せられて、直ちに自内證の法門を説かれたものなることを、信するのであつて、釋迦・大日は畢竟同體の尊に外ならぬのである。故に『廣付法傳』の初に

一味甘露逐器殊色。一相摩尼隨色分影。能説之心平等



而轉。所潤之意千殊各解。一三五乘源一派別。法報應化體同用異。

(全集・洋一)

と釋し、興教大師は『淨菩提心私記』に

問。三身體同用異意如何于。答。三身<sup>如来</sup>理智不二金剛是一。此一金剛但破入執。未破法執及無明時。云变化身。次漸破法執。伏無明時。云他受用報身。次入法二執及頓破無明時。名曰法身。此法身佛理智不二故。理名法身。智名智法身。雖此理智法身俱本有。以有始覺還成義故。亦名報身。

(興教大師全集・三七〇)

と明かし、又『守護國界主陀羅尼經』卷第九には

佛言秘密主。我於無量無數劫中。修習如是波羅蜜多。至最後身六年苦行。不得阿耨多羅三藐三菩提。成毘盧遮

那。坐道場時無量化佛。猶如胡麻徧滿虛空。諸佛同聲而告我言。善男子云何而求成等正覺。我白佛言。我是凡夫。未知求處。惟願慈悲。爲我解說。是時諸佛。同告我言。善男子諦聽諦聽。當爲汝說。汝今宜應當於鼻端想淨月輪。於月輪中作唵字觀。作是觀已。於後夜分。得成阿耨多羅三藐三菩提。

(縮藏・問七・五九右)

と説かれてある。此等の文證に由つて、大日釋迦の二佛同體なることは、日月を并べ睹るよりも明かである。只顯教に在りては、現実佛の釋尊を根本として、佛身を論ずるから、大日如來は釋尊所證の真理、即ち法身なりとする方面を力説し、真言密教に於ては、理想佛の大日如



來を中心として、佛身を建つるから、釋迦如來は之れから、流現せられた影像、即ち變化身なりとする方面を、力説するの異あるに外ならぬのであつて、固より佛身に二體あるのではない。前者が現実より理想への、向上的佛身觀とすれば、後者は理想より現実への、向下的佛身觀と謂ふべきである。

然るに、自門に於ける中古の學匠は多く、大日釋迦二佛の別體論を強調し、其の憑據として、『廣付法傳』の問。此塔中所有法藏者。爲釋迦如來所說耶。爲何佛說乎。答。非釋迦所說。何以故。應化佛不說內所證法故。問。若非應化佛說爲法身說。答。說此有二義。如法身說法章說。

(全集・洋・一四八)

と云へる文、又は『辯顯密二教論』卷下に『大日經』六『旨字果相應品』に大日の三身が虚空界に通じて、佛事を行ずるの義を、釋尊の事業に例する説文を引き了つて後、此文明大日尊三身遍諸世界作佛事。亦如釋迦三身。釋迦三身大日三身各各不同。應當知之。

(全集・洋・一五〇三)

と注せる文筭を擧ぐると雖も、此の中『付法傳』の文は、釋迦如來の名號を、應化佛に限るものとしての所論であつて、此の文を以つて二佛別體の證と見ることは妥當でない。又『二教論』の注の文は、『大日經』に示す所は、大日尊を本地法身とし、釋尊を加持應化の身とし、其の間に本迹を分つて、各別に説けるものなることを明した



に、過ぎぬのである。之れを喩ふれば、一個の金獅子を目して、或は金なりと云ひ、或は獅子なりと云ふが如く、顯密對辯門の上から、且らく本迹を分つて、顯密二教の教主を別立せるまでであつて、尠笑してこれを論ずるときは、遂に体同用異の説に飯着するのである。

大釋二佛畢竟同一佛體なりとすれば、釋迦佛は何れの時に大日如來の三昧に住して、兩部大經を説かれたかと云ふに就て、諸説區々であるが、就中釋迦佛成道後初七日に於ける、自受法樂の説法なりとの義を、最も勝れたものとされてゐる。併し、眞言密教より釋迦佛を見るときは、その成道の刹那に於て、父母所生の身に即して、法身大日如來を契證されたのであるから、五十年の轉法

輪は悉く、密教の宣布に外ならぬのである。之れを小乗と見、三乗と見、一乗と見るは、何れも皆機見の異なるが爲めで、若しも佛邊に約するならば、釋迦佛説法の凡ての時を以つて、密教の説時と観ることが出来るのである。故に興教大師は『舍利供養式』に

釋迦大師者法身性佛之應化。秘主密王之親教也。爲私密藏暫現第三重。欲濟顯機推説百億部。三乘五乘各謂我教主。尋實尋源唯是真言佛也。坐白蓮以告本地淨妙。列烏瑟以示果德幽玄。良有以也。一代利物之應跡。皆是三密加持妙業。八相成道之化儀莫非六大法身智用。

(興教大師全集・四七一)

と示されたのである。



第五節 本加要義

凡そ顯教に於ては、法身は佛陀所證の真理であつて、寂滅如空なるが故に、色相も無く、說法も無し唯應化身のみ、機類に應現して、顯教を説くと云ふけれども、真言密教に於ては、法身は能證の覺智と、所證の真理と、一致冥合して、其の間毫末も隔て無き、理智不二の位に在る佛身と見、六大・四曼の体相を具し、身・語・心三密の用を備へて、法爾常恒に秘密の法門を演説すと爲し、之れを大日如來と稱し密教の教主とするのである。

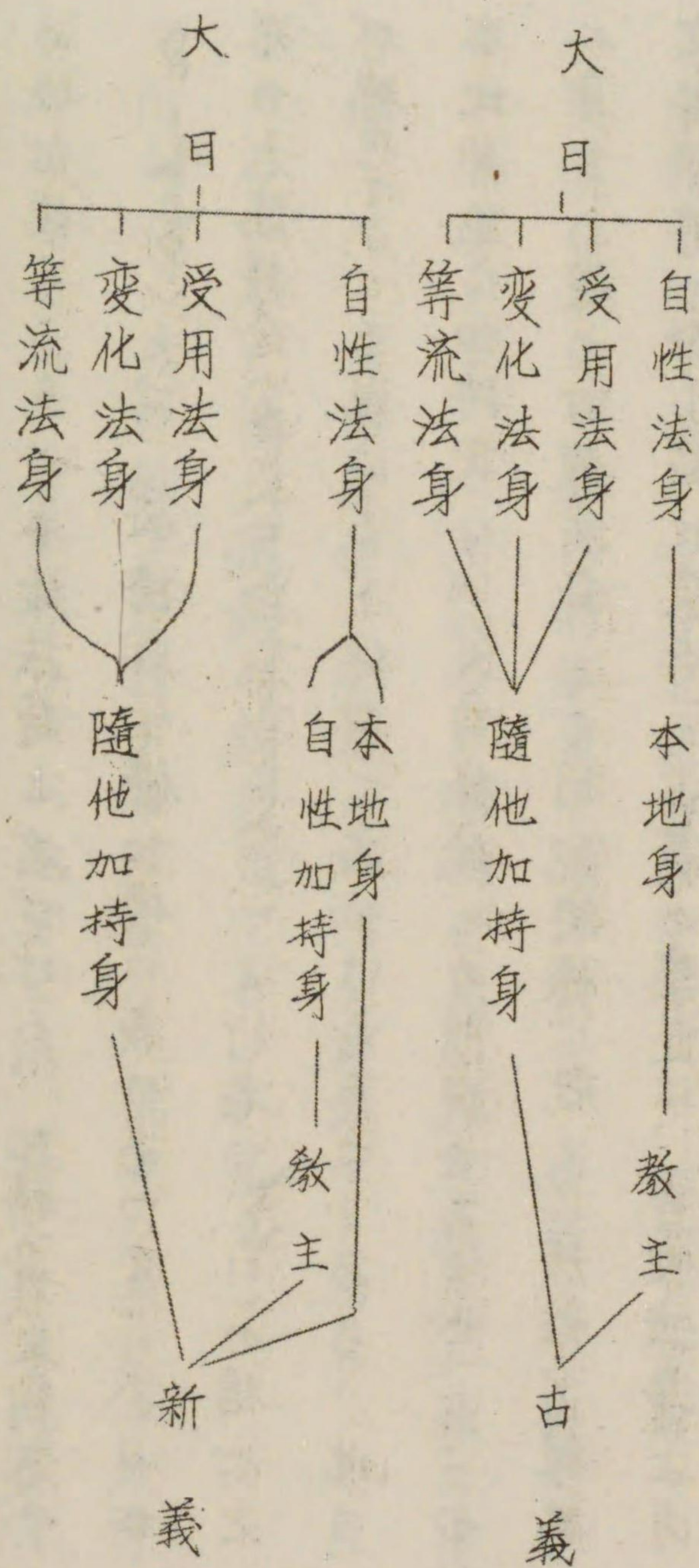
而して、其の教主を論ずるに當り、佛身の上に本地身と加持身との二身を分つ。本地身とは、具には本地法身

(*Makānāthāna-dharmā-kāya*) と云ひ、本は根本、地は所

依の義であつて、十界諸法の体性たる大日如來が、自證の位に住するを、本地法身と名づける。加持身 (*Adhiṣṭhita-kāya*) とは、加持は生佛加持の義であつて、大日如來の大悲護念 (*Maḥā-kāruṇīkya*) と行者 (*yogi*) の信心とが感應するとき現はるゝ佛身に名づけたものである。此の本地身並に加持身は、大日經疏の所説であるが、この二身と、彼の四種法身との相配關係に就て、法性・道範・果宝・宿快等の野山並に東寺の古義の學匠は、自性法身より出現せる、受用・變化・等流の餘三身を以つて加持身とし、教主たる曼荼羅中台の尊を、本地法身とするに對して、賴瑜・聖憲等の根嶺の新義の學者は、自性身に本地・加持の二身を開き、加持身に中台の尊と、餘三身の尊とあり



となし、曼荼羅中台の加持身を以つて、教主とするのである。今此の両説の二身と四身との関係を図示すれば次の如くである。



此の新古教主の異義は、もと『大日経』の教主の研究に、端を發したものであつて、彼の釈迦佛が菩提樹下に於て、豁然大悟し、遂に法身大日如來の位を獲得せられた、心中の理想境を、自證位 (Svayambhūta - āhāra) と云ひ、此の間を自受法界の境と稱する。此れよりして後、往昔の大悲願力に催ふせられ、衆生済度の方便に出づる、之れを加持世界 (Aksayamita - lokā) に出づと云ふのである。加持世界とは又瑞相土・隨他法界宮・塵道世界等とも稱し此の娑婆世界である。本地身説に於ては先づ、この自證の極位と、加持世界との、二重分別に依つて、自證極位は因位窮満した位であるから、能化の佛と、所化の衆生との、差別の相なく、十界悉く自性に住して、各々自覺聖



智修證の法門を説くものとし、之れを自受法樂と云ひ、又隨自意の説或は如義語の説法とも云ふのである。鳥語風聲、柳緑花紅、山高水長、皆是れ本地自性法身の説法である。此れ五大日經の正説會にして、其の法門を法然道と云ひ、其の經を法爾常恒の本と稱する。然も是の如き説法、是の如き經典は、加持世界の衆生は、其の利益を蒙り難きを以つて、次に加持世界に出で、衆生の機欲に隨ひ、所宜聞の法を説けるもの、即ち現流布の頭密等の諸經であるとする。自證説に於ては、その自性法身説法の會場を自證會又は自性會と稱し、此の自性會場に、未悟ジツギョウ實行の因人の有無に就て、道範は無き義を用ゐ、宥快等は因人有る義を採り、衆生の機根一ならざるを以つて、

若し内證に相應する、頭大の機は未悟の凡夫と虽も、自性會の當機なりと論じてゐる。此の自證位と加持世界とは、畢竟一法身の悲智二用を分つて、智門を自證位と云ひ、悲門を加持世界と云ふに外ならずとす。是れを本地身説又は略して本地説と云ひ、或は自證説とも名づける。本地身説に在りては、上轉下轉共に二重なりと虽も、加持身説に於ては、上轉は本地身説と同じく二重なれど、下轉は自證位即ち佛の心中を自證極位と加持門位(Addhi-  
sthitamukha-sthana)との二重に分ち、之れに加持世界を加へて三重の下轉を立て、自性法身にも、本地身と加持身との自證化他の二面を開き、本地身自證の極位は、上轉の終局であつて、天地全く絶対の一大日如來に皈して、



言語盡竟心行亦寂、唯獨自明了餘人所不見の境界なるを以つて、説法あることなく、諸の有情も、其の化益を蒙むること無きを以ての故に、次に自在神力加持三昧に住し、加持身を現じて、自證位を改めずして、會座には未悟實行の機なしと虽も、極位の大悲遠く未來機の爲めに、法身の心殿に於て、主伴説聽の儀式を莊り、自問自答自受法樂の説法をなし、衆生救済の手段腹案を講究する位を加持門と云ふ。是れ加持世界に出づる門にして、未だ加持世界に出でざる位である。此の位を大日經等の正説會とする。此の加持門を又自性會とも云ふ。これ自證説に於て自性會と自證會を同一に視るとは異なるのである。次に本質たる、加持門説法の影像是、更に加持世界に現

じて、正しく所化の機類に向つて、應病與藥の法を説く、是れを現流布の顯密等の諸經とする。之れを加持身説又は略して加持説と云ひ、或は加持門説と名づくるのである。加持身説に於て、特に加持門の一位を建つる所以は、説法なる語の解釋に起因するものであつて、即ち説法本意令他生解の故に、法然の道理を、衆生に悟らしめんが爲めには、自證の極位から、更に一位を下りて、其の機根に隨順して、法門を説くと謂ふにあり。此の加持身説の加持身は、中台の自性身なるが故に、高祖大師の自證説法の判釋をも壞することなく、又加持身なるが故に、疏家の自在神力加持三昧の釋義にも背かずと云ふ。而して、此の説法は所説の法門に約し、會座には當機なきが故



に、自受法樂の經文にも契ひ、又能説の方便に就き、遠く未來機に蒙らしむるが故に、説法本意、令他生解の通談にも順ずると説くのである。

本地身説は専ら、高祖大師の判釋に依り、自證の位は萬徳の根源にして、法身既に三密を具す、何ぞ説法なからんやとの道理を以つて、之れを成立する。要は本地身説は、自性法身有説法を規模として、顯密對辯せる鹿論に對し、加持身説は宗家と疏家との両説を融會せる。自宗の細論を要義とする。鹿細の義門同じからずと雖も、共に偏廢すべからざるものである。本地身説は法性・道範の諸師、之れを唱道し、宥快上人に至り、更に討究を加へて大成せるものであつて、加持身説は興教大師に起り、

後頼瑜僧正は道範師等の所説に對して、此の説を確立し、聖憲師に至り、更に潤色を加へて大成せるものである。

本地身説と加持身説とは、新古兩派の教義を異にする、主要の点であるが、古義に於ては、興教大師を本地身説方の人とし、新義に於てはこれに就て、先匠の異義があつて、新義の加持身説は瑜公の案立であつて、興教大師には關係がないとする者も、尠くないのである。今興教大師の著作を通覽するに、その「愛染講式」(全集・四五八)「舍利供養式」(全集・四七一)に「加持之門」なる句があつて、智山の學匠、實貫の「櫻陰腐談」には此の句を以つて、加持門説の本據としてあるが、此等は文段前後の關係から見ても、加持世界を形容した迄であつて、自證の



極位に對する、加持門の義でないことは明かである。此の他に加持身説の本據とすべき、加持門の語は見えないけれども、『密嚴淨土略觀』に

放光説法。兼自他兩利。神通遊戲。通内外二用。

(興教大師全集・五五)

と云ひ、又『自受法樂讚』に

放光説法。遍滿陰陽。自樂他益。普周現當。

(興教大師全集・四二七)

と曰ふが如き、此等の證文に依つて、興教大師の學説には、加持身説の深旨である、自性會に利益衆生の義あることを知るべく、仍つて興教大師は新義真言の宗祖であると共に、新義相承の加持身説の根本祖師であると、稱

せられてゐる。

此の本地・加持の両説に對して、これを調和會合せんと、試みられた學匠も、二三に止まらぬのである。就中智山の曇寂和上は、『大日經教主義』一卷を著はして、本地・加持の二身は不二であつて、能化に約せば本地身、所化に約せば加持身であつて、その一偏に執するのは、謬見なるの意を述べてある。又豊山の法住僧正は、『秘密因縁管弦相成義』二卷を製し、曇寂師の説を承けて、野山の本地身説は体を論じ、根嶺の加持身説は義を取り、宗家の多法界と、疏家の一法界とは、共に捨て難く、多法界即ち萬法の体には、三大宛然として周備せるものとする思想より觀れば、自證極位本地身説法の説が成立すべく、



一法界即ち萬法の實相は絶對無相にして一味平等なりとする立場より論ずれば、本地無説加持身説法の義が成立するのである。而して此の一多の法界も不二が上の而二であるから、野根の両説は、各々一義に據るものに外ならぬ。若し上轉門から云へば、自受法樂自證説法なるべく、下轉門から論ずれば、極位不説加持門説法なるべしと両説を止揚するのが法住僧正の批判の要旨である。

## 第八章 両部曼荼

### 第一節 序説

胎藏曼荼羅と金剛界曼荼羅とを併稱して、胎藏曼荼羅 又は両界曼荼羅とも云ふ。此の両部曼荼羅は、眞言密宗の教理の根本思想を、象徴的に示すと共に、修證の根本對象たるべきものである。今両部曼荼羅所詮の思想を圖示せば概要次の如くである。

胎藏曼荼羅は又胎藏法曼荼羅と云ひ、理曼荼羅であつて、未だ開顯せられざる本有本覺の理にあるが故に胎藏と云ふ。児の母胎に含藏せらるゝに譬ふ。是れ因曼荼羅

胎藏曼荼羅は又胎藏法曼荼羅と云ひ、理曼荼羅であつて、未だ開顯せられざる本有本覺の理にあるが故に胎藏と云ふ。児の母胎に含藏せらるゝに譬ふ。是れ因曼荼羅



である。而して方位に約すれば東曼荼羅と云ひ、六大の中では、前五大即ち色法の曼荼羅とする。中央の八葉蓮臺を以て、一曼荼羅の總体とする、蓮華曼荼羅である。之れに對して、金剛界曼荼羅は智曼荼羅にして、已に開顯せられたる修生始覺の佛智の境界を、一大曼荼羅に開いたものであつて、金剛は智慧 (*jñāna*) の堅固にして、惑障を摧破せざるなきに比す。是れ果曼荼羅である。而して方位に約すれば西曼荼羅となる。東と云ひ西と云ふは、日出と日没とを以つて、因果を標幟せるものである。六大の中では、第六識大即ち心法の曼荼羅とする。中央の大月輪を以つて、一曼荼羅の總体とする、月輪曼荼羅である。

以上は且らく、胎金兩部の曼荼羅を、相對的に見たる配釋であるけれども理智本來不二の故に、其の實兩部本來平等一体にして、共に吾人本具の淨菩提心の妙徳を開示せるものに外ならぬのである。是れを二而即不二と云ふと。かく胎金理智因果を並べて兩部の一具を傳ふる思想は多く支那に始まるもの、如くである。

次に兩部曼荼羅の圖繪として現はれたるもの所謂現圖曼荼羅の由來に就ては異説區々にして、一概に定め難い。

一説には高祖大師の「御請來目錄」に

和尚告曰。眞言秘藏經疏隱密不假圖畫不能相傳。則喚  
供奉丹青李真等十餘人。圖繪胎藏金剛界等大曼陀羅等一

十鋪。

(全集・洋二二〇)



と云へるより、高祖大師入唐傳法の師惠果和尚が特に大師の爲めに之れを圖絵せしめられたものであると云はれてゐる。曼荼羅 (mandala) の語は新譯では義によつて輪圓具足と翻すと虽も、旧譯では實體に就て壇又は道場と譯する。印度密教の常規としては、七日作壇と稱して、山林閑處に於て淨地を擇び、日時を定め、七日七夜を要して土壇を作り、最終の夜には、其の壇上に直接繪像等を描き、其中央に自ら座して、祈禱又は傳法を行ひ、翌朝未明に之れを破壊するを例とせるを以つて、其の圖絵は極めて粗略のものなるべきは推知すべく、曼荼羅を現圖の如く、絹紙に精巧細密に画いたものは、多く支那に傳來されて以後に發達したものの如くである。

現圖の曼荼羅を見るに、胎藏曼荼羅の四圍には、牡丹草を描き、金剛界曼荼羅の四圍には、寶生草を布く。是牡丹の福貴なるは、大悲胎藏生に相應し、寶生草の繁茂せる様は、金剛界の諸尊互に攝入し、各具五智無際智にして、圓融無碍なるに相應すと云ふ。

又胎藏曼荼羅の諸尊は、皆蓮華上の月輪中に安置し、金剛界曼荼羅は、皆月輪中の蓮華上に安坐す。是れ蓮華は、本有の理にして、肉團心 (Kishida) 、月輪は修生の智にして、智覺心 (Citta) を示し、胎藏の諸尊は、智佛が理佛の三昧に住するの義を表はし、金剛界の諸尊は、理佛が智佛の三昧に住するの義を示すと、傳へてゐる。

第二節 胎藏曼荼羅



胎藏曼荼羅は、具には大悲胎藏生曼荼羅 (*Mañi-kārama-*  
*garbhadhāra-maṇḍala*) と云ひ、或は大悲曼荼羅、悲生曼  
荼羅等と名づける。常には金剛界曼荼羅に對し胎藏界曼  
荼羅とも云ふが妥當の稱呼ではない。胎藏は梵には藥縛  
俱舍 (*Garbhakṣā*) の譯にして、母胎の義である。胎中  
に托生せし兒子を、育成し誕生せしむる如く、大悲方便  
を以て、淨菩提心を增長せしめ、無量の佛徳を發生する  
を、大悲胎藏生と云ふのである。

現圖の胎藏曼荼羅は十三大院 (又十三大會とも云ふ)  
より成ると云ふと虽も、其の中、四大護院は、四方門の相  
向守護の天に攝在して、別開せざるが故に、十二大院で  
ある。又十一院建立のものがある。それは蘇悉地院を闕

くので、此の院は虚空藏院と相通の義がある。此等の三  
種は廣略の別に外ならぬのである。現圖曼荼羅の十二大  
院は更に約して、四重圓壇と稱する。四重と云ふも其の  
実東西 (前後) 四重、南北 (左右) 三重である。若し東  
方の釋迦院を、乱脱と見て第三重に屬し、西方の蘇悉地  
院を虚空藏院に攝すれば、三重の曼荼羅となるのである。

胎藏十三大院は、各々獨立の思想を詮はすと共に、又  
相互に關聯せる思想を、有するものと解すべきである。  
現圖曼荼羅各會の尊数は先づ中台八葉院は九尊から成り  
中央の蓮臺に大日如來、各華葉には四方四隅に寶幢、閻敷  
華王、無量壽、天鼓雷音の四如來、普賢、文殊觀音、弥勒の四菩  
薩を安ずる。此の八葉は吾人胸中の、八辨の肉團心 (*Ṣaḍaṅga-*



を象れるものであると云ふ。此の院は、胎藏十三大院の  
總徳にして、他の十二大院は其の別徳である。次に遍知  
院は、又佛母院或は佛心院と稱し、中台の東に在り、中  
央の遍知印即ち、三角智印を挾んで、其の左右に、大安  
樂不空眞実、大勇猛、佛眼佛母、七俱胝佛母の四尊並に  
侍者二尊合して七尊ある。此の院の諸尊は、諸佛遍知の  
徳と諸佛能生の徳とを表はしてゐる。次に觀音院は、又  
蓮華部院と名づけ中臺八葉院の北に在り、内側から、第  
一列に蓮華部發生以下七尊、第二列に大隨求以下七尊、  
第三列に披葉衣以下七尊、外に侍者十六尊合して三十七  
尊から成る。此の院の諸尊は、如來大悲の化用を表はし  
てゐる。次に金剛手院は、又金剛部院或は薩埵院と名づ

け、中台院の南にあり、内側から、第一列に金剛部發生  
以下七尊、第二列に虚空無垢持金剛以下七尊、第三列に  
金剛輪持以下七尊、外に侍者十二尊合して三十三尊から  
成る。此の院の諸尊は、大智上求菩提の徳を表はしてゐ  
る。次に持明院は、又五大院と稱し、中台院の西にあり、  
般若菩薩を挾んで、左右に不動、降三世、大威徳、勝三  
世の四大明王がある。此の院の諸尊は、折伏攝受の二門  
に依つて衆生を濟度することを表はしてゐる。次に釈迦  
院は遍知院の東にあり、釈迦牟尼佛以下三十九尊から成  
る。此の院の諸尊は、娑婆世界に出でて衆生を化益する  
ことを表はしてゐる。此の院の釈迦牟尼佛は變化身であ  
つて二乘以下外金剛部の能化の尊であるから、第三重外



金剛部院に画くべきを、惠果和尚は具緣品の文相を無畏三藏の如く第三重の乱脱と見ずして、そのまゝ遍知院と文殊院との中間に一院を設けられたので、東方は四重となり、之れに相對せしむる爲め、西方虚空藏院の眷族たる、蘇悉地をも開いて、一院とせるものである。次に文殊院は釈迦院の東に在り、文殊菩薩以下二十五尊から成る。此の院の諸尊は如來の智慧能く諸の戲論を絶つことを表はしてゐる。次に除蓋障院は金剛部院の南に在り、悲愍菩薩等九尊から成る。此の院の諸尊は、一切衆生の蓋障を除く力あることを表はしてゐる。次に地藏院は觀音院の北に在り、地藏菩薩以下九尊から成る、此の院の諸尊は、一切衆生の苦を抜き、樂を與ふるの徳あること

を表はしてゐる。此の院と、前の除蓋障院とは智慧相對一具の法門である。次に虚空藏院は、持明院の西にあり、中央の虚空藏、南端の金剛藏王、北端の千手觀音以下二十八尊から成る。此の院の諸尊は、能く衆生の願に従つて、一切の寶を與ふることを表はしてゐる。次に蘇悉地院は、虚空藏院の西にあり、十一面觀音以下八尊から成る。此の院の諸尊は、果徳を成就せしむる力あることを表はしてゐる。次に外金剛部院は、東南西北の四方を囲み、四方合して二百五尊あり。此等の諸尊は、凡聖不二の理を表はしてゐる。以上現圖胎藏曼荼羅の尊数、總じて四百十四尊である。

胎藏曼荼羅は金剛界曼荼羅に比べて、其の建立は整然



としてみぬので、之れを雜亂住と云ふ。此の曼荼羅の四方の門を金剛門と名づける。此の四門は、上轉進趣に約すれば、發心修行菩提涅槃の、四轉を表はし、下轉化他に約すれば、布施愛語利行同事の四攝を示すと云ふ。又門上の忿怒形は、金剛の智を示し、胎藏の理に證入するには、金剛の智を門とするの義を顯はすものと傳ふ。

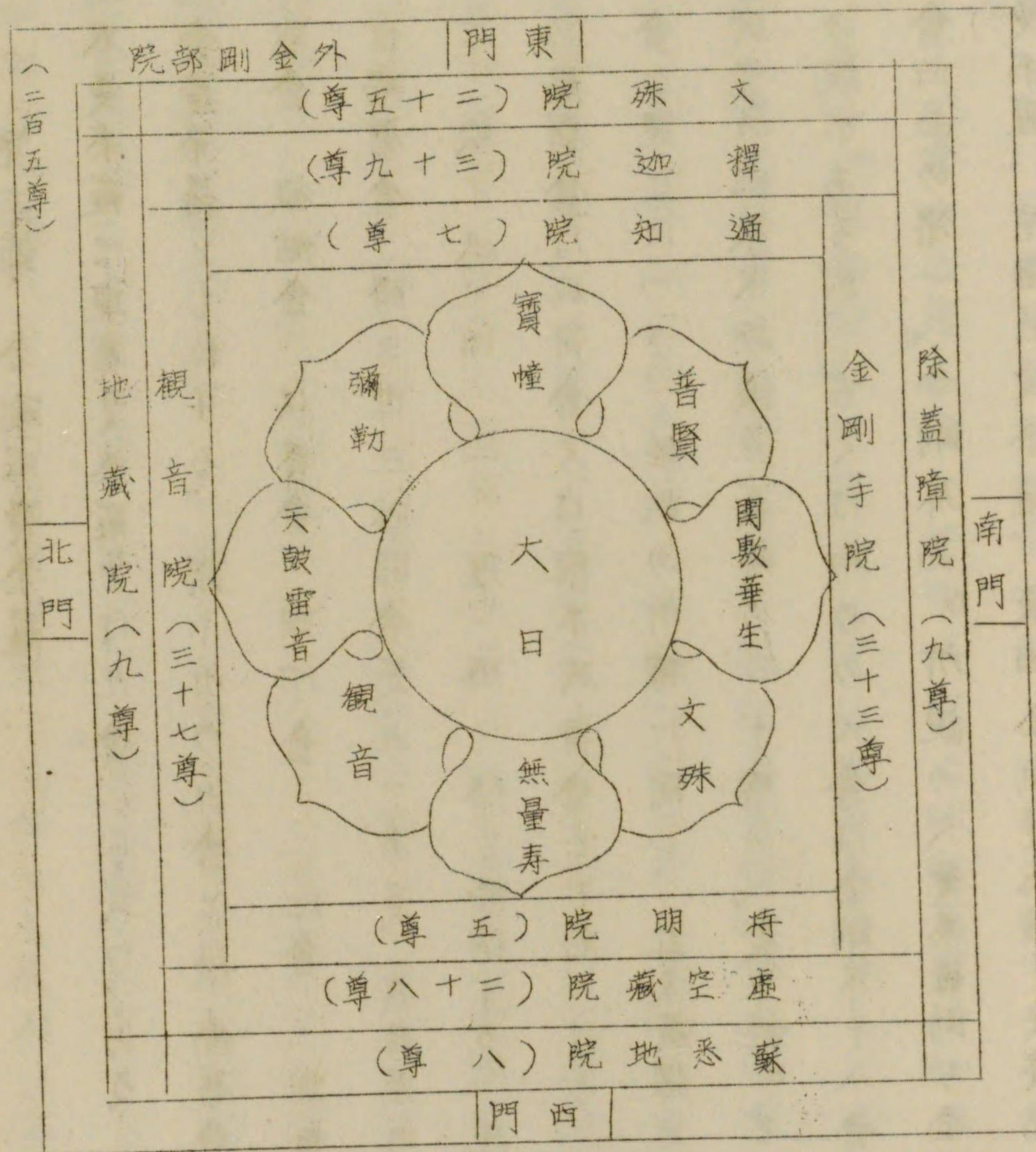
古來胎藏曼荼羅十二大院の諸尊を、佛金蓮の三部に統攝し、中台並に其の東西に當れる各院を佛部とし、南方の金剛手院並に除蓋障院を金剛部とし、北方の觀音院並に地藏院を蓮華部とし、四圍の外金剛部院は、三部守護の善神とし、此等の諸神は印度の民間に於て、一般に尊崇せられたるものにして、之を攝取し、包容して、此等

も亦、大日如來の變化等流なることを示せるものである。而して、此等佛・金・蓮の三部は次での如く吾人の自心の實相である。淨菩提心を具象化した。大日如來の大定 (Mahā-dhyāna) 大智 (Mahā-jñāna) 大悲 (Mahā-karunā) の三徳であると云ふ。従つて三部の諸尊は、大日如來の萬徳中の一徳を負ふて、機縁に應じて、流現せられた。大日如來の分身散影に外ならぬのである。

胎藏曼荼羅は「大日經」に據つて、建立せられたものであつて、「大日經」には三種の曼荼羅が説かれてゐる。「具緣器」と、「轉字輪品」と、「秘密曼荼羅品」との説是れである。就中「具緣器」の所説を以て、胎藏曼荼羅の基本とし、是れを經所説の曼荼羅と云ふ。此の外に



胎藏曼荼羅



大日經疏<sup>レ</sup>卷六に、阿闍梨所傳の曼荼羅を説く。具  
 緣品<sup>レ</sup>のそれに比すると、建立は大同であるけれども、  
 諸尊の数を増加してゐる。此等の曼荼羅は只説文に止ま  
 り、圖繪として、古來我國に傳はつたものには胎藏圖像  
 と、胎藏旧圖様と、現圖曼荼羅との三種である。前の二  
 つは智証大師の請來、現圖曼荼羅は弘法大師、智証大師  
 及び宗叡の請來にかゝるものである。現圖とは大日經<sup>レ</sup>  
 並に大日經疏<sup>レ</sup>の説文の曼荼羅に對し、惠果和尚が弘  
 法大師の爲に、現に圖繪せられたものと云ふ意味である  
 と傳へられてゐる。



第三節 金剛界曼荼羅

金剛界曼荼羅は現圖曼荼羅では九會コから成つてゐる。故に九會曼荼羅とも稱する。謂ふ所の九會とは、羯磨會、三昧耶會、微細會、供養會、四印會、一印會、理報會、降三世羯磨會、降三世三昧耶會是れである。普通是れを羯・三・微・供・四・一・理・降・降と略稱する。此の中初の羯磨會は成身會又は根本成身會とも名づける。此の九會の建立につき、經軌の所據に關し、近末藏譯との比較研究の結果米施護三藏譯の三十卷の「教王經」であるとの説があるが、古くは初めの六會は金剛界十八會中の初會四品の第一「金剛界品」所説の六曼荼羅即ち金剛界大曼荼羅、陀羅尼曼荼羅、微細金剛曼荼羅、供養羯磨

曼荼羅、四印曼荼羅、一印曼荼羅に相當すとすし、第七會は、十八會中の第六會大安樂不空三昧耶眞實瑜伽會にして、是れ「理趣經」所説の、十七尊曼荼羅なりと云ひ、又は十八會中の第十三會、大三昧耶眞實瑜伽會に相當すと云ふ。第八第九の兩會は、初會四品の第二「降三世品」の十曼荼羅中第一、第二の曼荼羅に相當すとす等種々の異説がある。従つて此の九會は、各々独立の曼荼羅を合集せしものと謂ふべく、而も此等九會は、相互に關係せるものとして、統一的解説をなすことを常とする。九會相関の解説にも、亦種々の異説ありと雖も、古來最も多く行はるゝは、羯・三・微・供・四・一・理・降・降と次第する。從果向因の下轉門と、之れと反對に次第する從因至果の



上轉門との二説である。今先づ上轉門の次第に依り、九會の關聯を示すと、降三世三昧耶會は、眞言行者上求菩提の大誓願を發起することを示し、次に降三世羯磨會は、三毒を降伏し見思二惑を斷破し、成道の障礙を除却することを示す。五解脱輪中、東方輪の金剛薩埵の位に、降三世明王を画く。其の三面三目忿怒の相は、三毒を降伏するの相にして、又左の足に大自在天を踏み、右の足に大自在天の妃を踏むは、次での如く見思二惑を斷破するの慍懺なりと云ふ。次に理趣會は、既に二惑三毒の調伏に依つて、般若の理趣を得るときは、終觸愛慢の四煩惱、色聲香味觸の五塵等も、皆悉く菩提心の具徳なることを表はす。次に一印會は、五相成身觀に依つて、本尊大日

と瑜伽し、曼荼の諸尊皆此の大日一尊に投入して、智拳印をばすることを示し、次に四印會は、四佛の加持に依つて、成佛の義決定することを表はし、供養會は、本尊と諸尊との間に相互供養の事業を示す。次に微細會は、現智身、見智身、四明等の微細の行相を示し、三昧耶會は、道場觀にて種子表じて三形となることを示し、最後に羯磨會即ち成身會は、三形更に轉じて、威儀具足の羯磨身を成ずることを示すのである。次に下轉門の次第に依り、九會の關係を説くと、羯三微供の四會は、次での如く大三法羯の四種曼荼羅にして、四曼は各々不離の故に、一處に合して四印會と成り、四印會は更に獨一法身の一印會となる。以上の六會は大日如來を以つて中臺とす。



大日如來は本地自性身なるを以つて、三輪身の中では自性輪身 (*svabhāva-cakrapāya*) である。而して此の自性輪身から衆生齊度の爲めに、正法輪身 (*Saddharma-cakrapāya*) の金剛薩埵を化現するを理趣會とし、更に強剛難化の衆生に對して、教令輪身 (*Adharma-cakrapāya*) の降三世明王の忿怒相を、示現せるを降三世の二會とすと云ふ。降三世とは三界の主たる大自在天 (根本無明) を降伏するの意なりと釋するのである。

九會の尊数は、現圖曼荼羅に依れば、羯磨會は千六十一尊ある。即ち五佛、四波羅蜜、八供養、四摂、賢劫千佛、外金剛部二十天、及び四大神是れである。中央大金剛輪 (一大圓輪) 中に、五智五佛を表する、五解脱輪 (

五月輪) があつて、此の五解脱輪の中央の月輪に、大日如來及び金、宝、法業の四波羅蜜菩薩、四方の月輪に阿閼鞞半弥陀、不空、成就の四佛及び其の四佛各々の四親近即ち十大菩薩を安じ、大金剛輪の四隅には、嬉鬘歌舞の内の四供養の菩薩あり。地、水、火、風の四大神は、輪外の四隅に在つて、大金剛輪を持つるの相を為す。大金剛輪は實多心を表はし、同時に又空大を幪幪し、四大と合して五大となり、五大は即ち五智にして、是れ亦各具五智を表はすと云ふ。次に外院の四隅に香華燈塗の外の四供養の菩薩、四方に鈎索鎖鈴の四摂の菩薩を安ずる。又此の八尊の間に賢劫 (*Bhadrapāya*) 一千佛を列し、次の外院に二十天を安ずる。此の中五佛、四波羅蜜、十六大菩薩



内外八供・四摂の各尊を金剛界三十七尊と名づける。三昧耶會・微細會・供養會は各七十三尊ある。五佛・四波羅蜜・十六大菩薩・八供・四摂・賢劫十六尊・外金剛部二十天である。諸尊の位置は羯磨會に同じきも、賢劫千佛に代ゆるに賢劫十六尊を以つてし、且つ四大神を除くを異とする。三昧耶會は、各尊皆其の内證本誓を示す。

微細會は外金剛部二十天を除く餘の諸尊は皆三股金剛杵中に住す。是れ諸尊の各具五智無際智等の重々微細の智を用を示す。四曼中の法曼荼羅に配するも、種子を以つて画けるに非ず。諸尊が微細金剛智の法性を觀察する三摩地に住せる姿を表はすを以つて法曼荼羅と云ふ。供養會は、五佛を除き餘の十六大菩薩・八供・四摂等は皆左手を拳

にし、右手に蓮華を捧持し、其の上に三形を安じ、内外相互供養の意を示す。四曼中の羯磨曼荼羅に配す。羯磨は事業にして供養の事業を云ふなり。四印會は、十三尊ある。即ち中央月輪中に大日、東方に金剛薩埵、南方に金剛寶、西方に金剛法、北方に金剛業の四菩薩を安じ、大月輪の四隅に金宝法業の四波羅蜜の三形、並に嬉鬘歌舞の内の四供養を安ずる。一印會には、智拳印に住する五智円滿の獨一法身たる大日一尊を圖す。理趣會に、十七尊ある。即ち中央に金剛薩埵四方に欲觸愛慢の四金剛、四隅に意生計里吉羅愛樂意氣の四金剛女あり。外院に四摂及び内の四供養を安ず。降三世羯磨會は、七十七尊ある。圖位は大途三昧耶會に同じきも、外金剛部の四隅に



別に金剛夜叉軍荼利大威徳不動の四大明王を守ず。降三世三昧耶會は、七十三尊ある。前の降三世羯磨會は事業具足の身相を示せるに對し、此の會は三形を列する。以上九會諸尊の數、總じて千四百六十一尊である。

金剛界曼荼羅に在りては、胎藏曼荼羅の佛部金剛部蓮華部三部の外に、更に寶部と羯磨部とを立て五部を以つて分類せられてゐる。五部は普通是れを佛金蓮寶羯と略稱する。而して此の五部は胎藏曼荼羅の三部統攝と異り、五佛を以つて、直ちに之れに充つるのである。即ち中央大日如來は佛部の主にして、東方阿閼佛は金剛部の主、南方寶生佛は寶部の主、西方阿彌陀佛は蓮華部の主、北方不空成就佛は羯磨部の主なりとする。又五智を以つて

五佛に配するときは大日如來は法界體性智（法界智）阿閼佛は大圓鏡智（金剛智）、寶生佛は平等性智（蓮頂智）、阿彌陀佛は妙觀察智（蓮華智）、不空成就佛は成所作智（羯磨智）である。金剛界九會曼荼羅の諸尊は、此の五部五智を以つて、分類し統攝せらるべきものとする。尚ほ此の五智五佛の關係を明示せるは、不空三藏所譯の金剛頂部の經軌であつて、無畏三藏所譯の胎藏部の經軌には、未だ其の關係を明かに説示せるものはないけれども、後には胎藏曼荼羅の、中台八葉院に於ける、大日寶幢闍敷華王無量壽天鼓雷音の五佛も亦、五智の具體的顯現なりと説くに至り、凡そ大日如來の總徳を、四方面より見たるまゝを、四智四佛となし、總合すれば法界體性

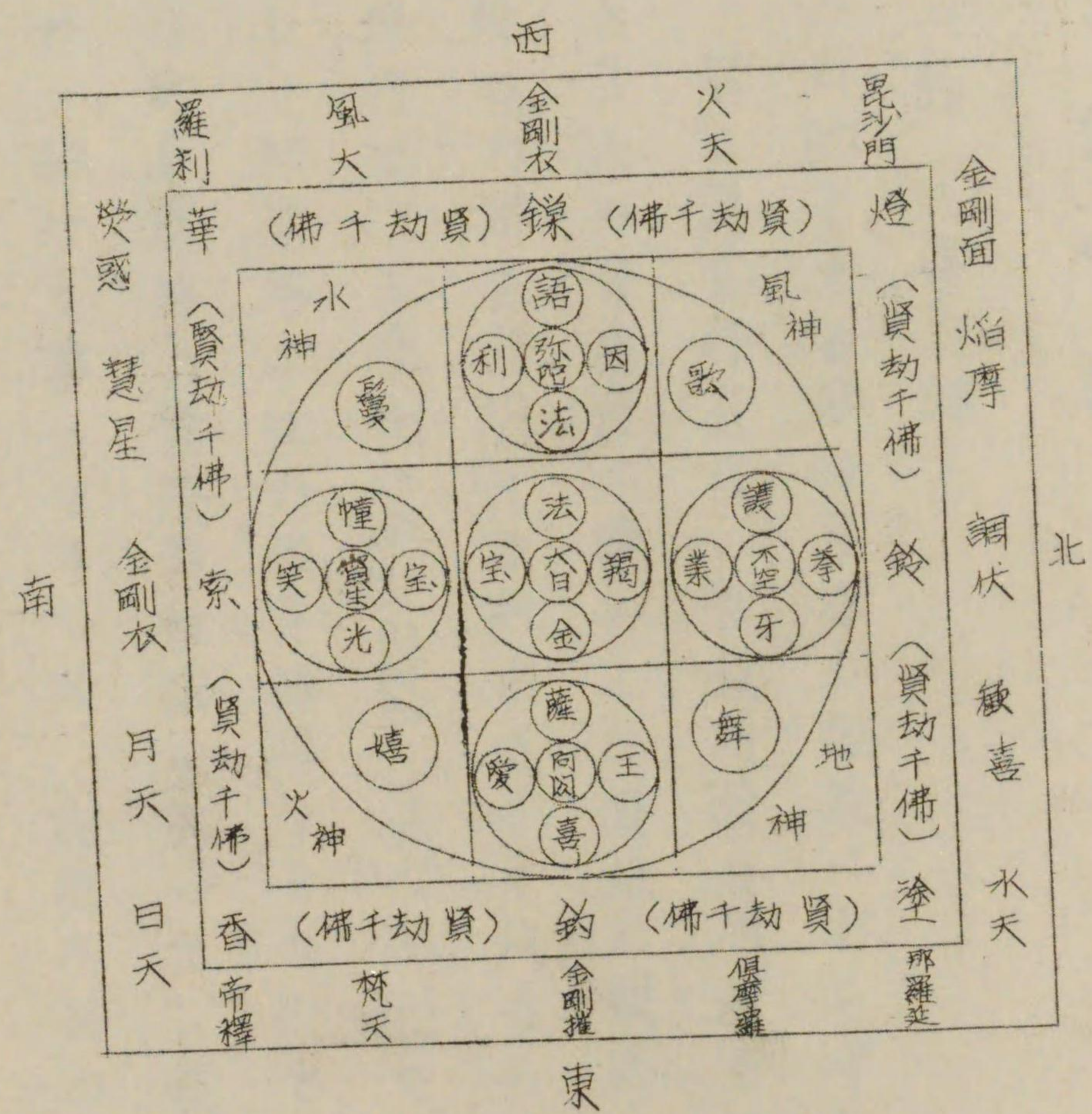


智の一智、又は大日如來の一佛となり、開けば大日鏡智等の四智、又は阿閼鞞幢等の全胎兩部の四佛乃至一切の諸佛諸菩薩、及び天神地祇の類となるべく、大日如來を普門の尊 (*Saṃantamukha-pradhāna*) と稱し、餘の諸の尊を一門の尊 (*Ekamukha-pradhāna*) と云ふは、此の義に依るものである。従つて曼荼羅會中の諸尊は、畢竟大日如來が神力加持の爲めに、流出し應現せられた、分身散影に外ならぬのであると共に、又此の大日如來は眞言行者、自心の實相たる、淨菩提心 (*Śuddha-bodhicitta*) 中の佛であつて、諸佛諸菩薩は、皆悉く此の淨菩提心から出生されたものであり、又淨菩提心の功德 (*puṇya*) 相の顯現であるとするが、密教の曼荼羅の思想であつて、

繪本等の形像曼荼羅は、吾人行者が、瑜伽觀行中に於て、自心の實相を觀照する、方便として建立せられたるものに外ならぬのである。



會 磨 羯



羅 茶 曼 界 剛 金

	西				
四	一	理			
印	印	趣			
5	會 五	6	會 四	7	會 三
供	(下轉)	羯		降三世羯磨會	
養		磨			
4	會 六	1	會 九	8	會 二
微		三		降三世三昧耶會	
細		昧			
3	會 七	2	會 八	9	會 一
	東				



## 第九章 實踐修行

### 第一節 序説

凡そ佛教の目的とする所は單なる理論にあらずして、實踐にある。故に眞言行者は、聖教所詮の原理を學ぶと共に、是れを吾人の身・語・意三業の上に實地に觀念修行を凝らし、佛陀の力用を活現する所がなくはならぬ。眞言行者の修行は、三摩地 (Samādhi) 法に依つて凡聖不二の觀に住し、阿字本不生の理を證悟するものとす。即ち三摩地法は即身成佛の實踐的行法であつて、從來餘の諸教の中に於て闕けて書せざりし所、密教不共の修行法なりとされてゐる。されば眞言行者は須らく、不斷に此



の三摩地法を實踐修行すべきものである。而して眞言密教の經軌は主として、此三摩地法門を開示したものである。其の行法は極めて重々多端であるが、今は只實踐修行に関する重なる事項を擧げて、其の概要を解説することとする。若しそれ諸尊の儀軌觀法等は明法の阿闍梨 (Hōryū) に就て、親しく面授口傳を求むるにあらざれば、其の甚深の秘趣を會得することは出來難いのである。

### 第二節 觀行本尊

眞言行者が、三摩地の觀行を修する時、其の對象とする、佛菩薩明王天等を、本尊 (Satsyūshi - devata) と稱する。本尊の名義に就ては、行者が諸尊の中に於て、根本中心として尊崇する故に、本尊と名づくと、又行者と、已

成の佛と、及び一切衆生との、本來所具の自性清淨心 (Svabhāva - śuddha - citta) は、世間出世間に於て、最勝最尊なるが故に、本尊と名くるとの二義がある。『大日經疏』第二十には本尊の名義を釋して、

本尊者梵音娑也地提縛多若但云提縛多者直所尊之義也。尊亦云自尊謂自所持之尊也。

(縮藏餘八八一右)

と云ひ、又『秘藏記』には

我本來自性清淨心。於世間出世間最勝最尊故曰本尊。又已成佛本來自性清淨理。於世間出世間最勝最尊故曰本尊。佛與我無二無別。乃至一切衆生各別身中本來自性清淨理。於世間出世間最勝最尊也。我與佛及一切衆生無二無別。是三



平等之心也。

(全集洋三〇〇)

と説いて、『華嚴經』の「心佛及衆生是三無差別」の教義を運用して、行者と已成の佛と及び一切衆生との、本來所具の自性清浄心を以つて本尊としてある。

眞言密教に於ては、大日如來を以つて、總徳を司る普門の尊とし、此の大日如來を中心とする、兩部曼荼羅の佛・菩薩・明王及び天等の諸尊は、皆大日如來の別徳を司る一門の尊と立つるが故に、其の所崇の本尊も、一尊に限ることなく、行者の機欲に随つて、其の歸依する本尊も、無量に存するものと爲すを、其の特色とする。而も諸尊は且らく、平等中に差別を建立せるに外ならずして、一門の尊を通じて、普門の尊を觀照すべく、諸尊と

大日如來とは淺深高下の別あることなしとする。之れを一門即普門と云ふ。而して眞言行者が自己の本尊を定むるには、先づ灌頂壇に入りて、投華得佛し、其の所得の尊を以つて、我が本尊と定め、其の内證三密の法を傳受して、懇懃に精進修行するときは、能く行者の三業、本尊の三密に同じ、其の一門の尊よりして遂に普門の尊の果徳を契證するものとす。『大日經疏』第一に此の義を釋して次の如く示されてある。

若諸行人懇懃修習能令三業同於本尊從此一門得入法界。

即是普入一切法界門也。

(縮藏餘七・四右)

又此等無量の本尊に字・印形の三種の別があり、其の三種に又有相と無相との二種を建てる。『大日經說本尊三



昧品 第二十八に云はく

諸尊有三種身所謂字印形像。彼字有二種。謂聲及菩提心。印有二種。所謂有形無形。本尊之身亦有二種。所謂清淨身非清淨身。

(縮藏閣一五二右)

と、此の字 (*akṣara*)・印 (*mudra*)・形 (*rūpa*) は即ち諸尊の種子と、三昧耶形と、全身の形像とにして、其の有相とは、行者自身の外に本尊を立て、無相とは、行者自心中に於て、直ちに本尊を求めんとするものである。先づ字の聲とは、本尊の種子たる、阿字等を唱へて絶えざらしめ、又其の聲を以つて、常に出入の氣息を調ふるのである。菩提心とは、字義を觀ずるを云ふ。例へば阿字は是れ淨菩提心の種子なるを以つて、行者自心の中に、

自性清淨の菩提心を觀するのである。次に印の有形とは、諸尊所持の刀劍輪寶金剛蓮華及び印契等の三形を、造作して觀ずるを云ひ、無形とは自心の中に、諸尊の本誓を觀ずるを云ふ。次に形像の非清淨身とは、繪本等の有相の形像を觀ずるを云ひ、清淨身とは、自己心中所觀の無相の佛身を云ふ。總じて、有相の本尊は因にして、無相は果である。初心の行者は、先づ自心の外に字・印・形の有相の本尊を觀じ、後に漸く醇熟して自心の中に無相の本尊を觀ず。此の自心を本尊とし、自己の尊貴を知り、如實に其の實相を證悟するを以つて、眞言行者の究竟の目的とするのである。

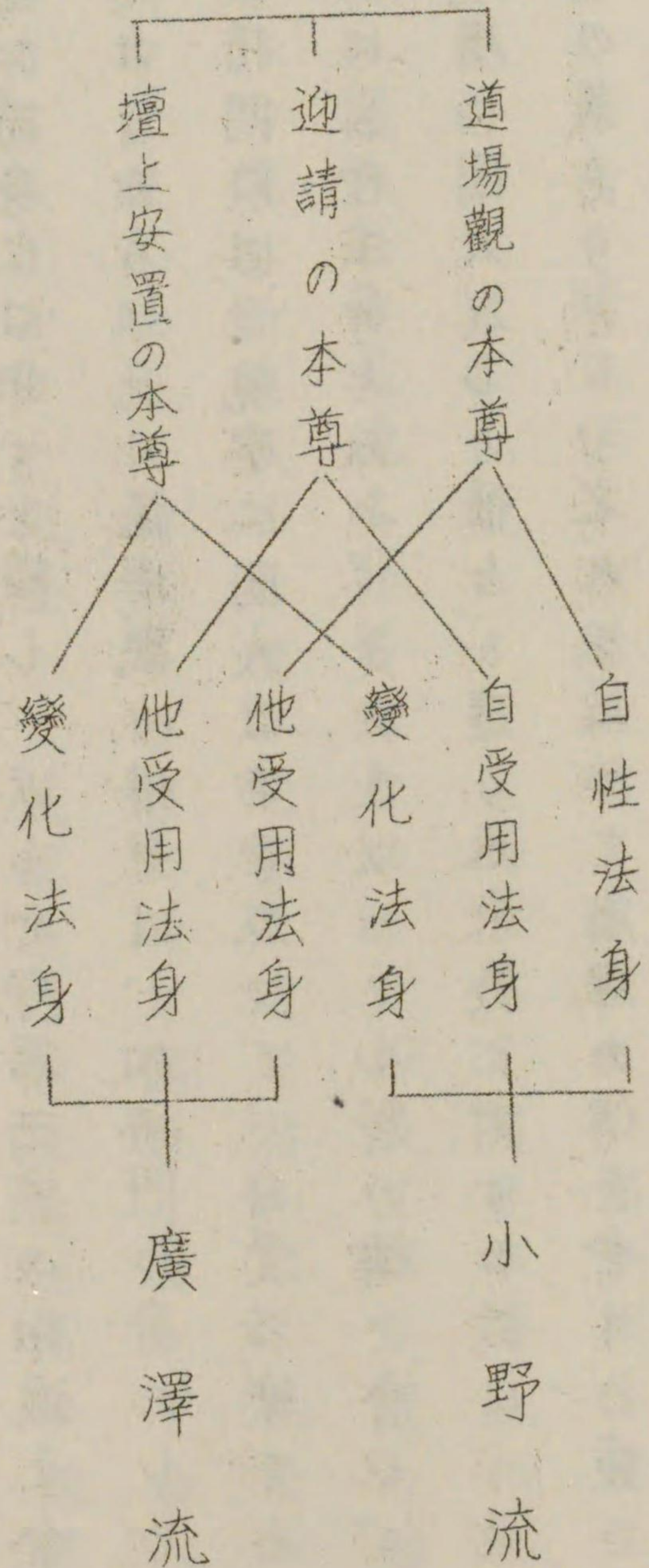
又本尊に道場觀の本尊と、迎請の本尊と、壇上安置の



絵木の本尊との三種を分ける。眞言行者瑜伽の道場に於て、一座の行法を修するに當り、已成の尊を他方の淨土から迎請して、其の護念を蒙らんが爲めに、先づ以つて自己の菩提心中に、理想を以つて觀念に依り、本尊の道場を建立し、其の本尊の相好を觀念する。是れを道場觀と云ふ。即ち行者は、迎請の作法に依つて、已成の佛を迎へ、四明（四攝）の加持に依つて、壇上安置の繪木の本尊と、冥合一体ならしめ、次に入我我入觀・正念誦等の作法に依つて、此の壇上の本尊と、行者自身の菩提心中の本尊、即ち道場觀の本尊とを瑜伽せしむるものとする。

此の道場觀と迎請と及び壇上安置の、三種の本尊と、

自性・受用・變化等の佛身との、關係に就き、野澤兩流の所傳同じくない。今是れを圖示すると次の如くである。



此の中小野流所傳の意は、所證の理と冥合するは、能證の智なるを以つて、自受用智法身を迎請して、道場觀の自性理法身に、冥合せしむる義であつて、廣澤流所傳の意は、他をして法樂を受用せしむる、他受用法身を迎



請して、道場觀の他受用法身に冥合せしむる義である。  
此の二種の他受用法身に就き、頼瑜僧正は道場觀の本尊  
は、行者の所觀なるを以つて、第一の自性法身中の自性  
加持身にして、第二の受用法身中の、他受用法身即ち隨  
他加持身には非ずと釋し、以つて野澤兩流の相違を會釋  
されてゐる。此れ道場觀の佛身は、加持門の身にして、  
加持門には、現座に因人なきを以つて、自受法樂である。  
故に自性法身と云ふ。是れを以つて小野の傳と會し、又  
現座に因人なしと虽も、遠く未來機に對する故に、他受  
用の義ありとし、之れを以つて廣澤の傳を會する意であ  
る。壇上安置の繪木の本尊は、畫師彫刻師等の巧匠の緣  
力に因つて、化現せるものであるから、兩流共に之れを

變化身としてゐる。

繪木の形像は、六大法身の隨緣顯現にして、住持の四  
曼となれる時は迷人の所見なりと雖も、若し相を捨て、六  
大体性から之れを觀るときは、諸法悉く阿字本不生の故に、  
其の儘法然の具徳に非るはないのである。故に彼の繪木  
等の形像を新造して事理の開眼作法を行ふは、凡夫が諸  
法の實際に暗く、繪木の形像を以て偶像と爲し、吾人本  
具の眞法身と全く別なりと誤認するが如き迷情を遮遣し、  
且つ又修生加持の功力を本具の徳に加へて、其の功德を  
發現せしめんと擬するものに外ならぬ。

之れを要するに眞言行者所觀の本尊は我等の身心を離  
れて別に存するものではない。即ち所崇の本尊は、我等



の身心の實相たる淨菩提心 (Suddha - bodhi citta) を觀照せんが爲めの明鏡であつて、若し眞言行者心を靜めて、觀佛三昧 (Bhūvanā - suddhasamadhi) に住する時は、自ら本具の五智三十七智等の佛徳を現前することを得るであらう。

### 第三節 三句五轉

三句五轉は眞言行者の凡位より佛果に至る從因至果の次第を明せる明せるものであつて、三句とは「大日經住心品」第一に云はく

世尊如是智慧。以何爲因。云何爲根。云何究竟。(中略)佛言。菩提心爲因。大悲爲根本。方便爲究竟。秘密主云何菩提謂如實知自心。

(縮藏閣一七九)

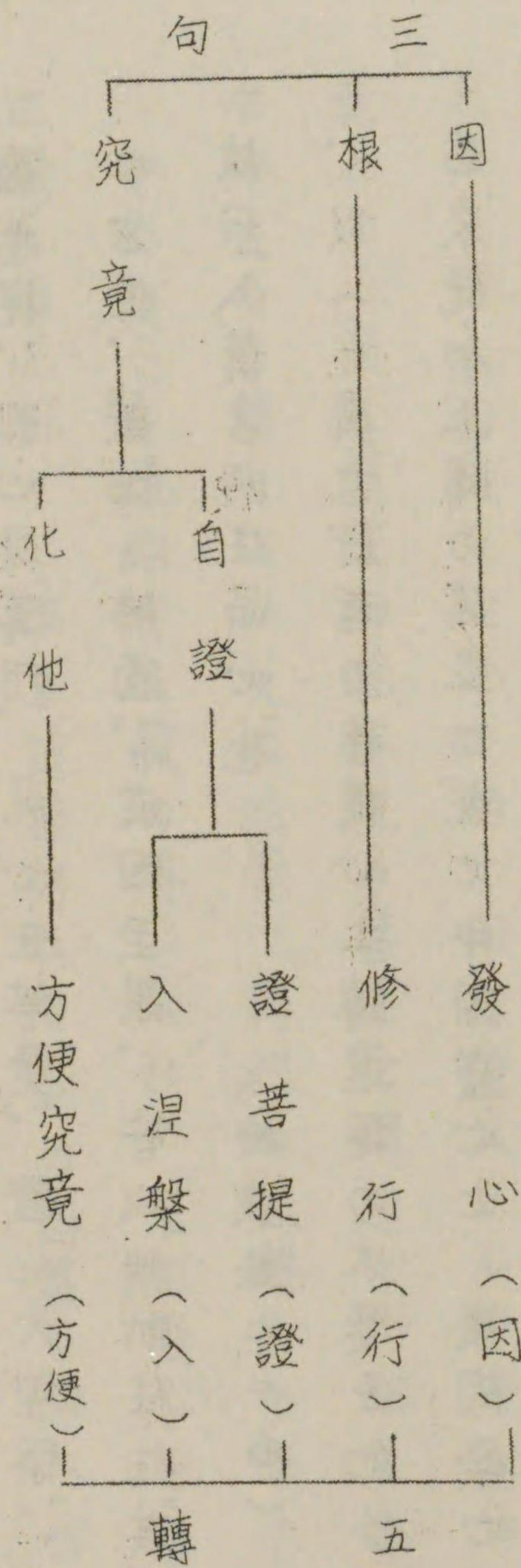
と明し、此の「菩提心爲因、大悲爲根本、方便爲究竟」の三句を因根究竟の三句と稱し、此の三句の中に「大日經」の要旨乃至一切の佛法の大宗を攝すと云ふ。先づ菩提心爲因とは、菩提心は即ち衆生本具の白淨信心にして、眞言行者は此の菩提心を發起し、凡聖不二の理を信じ、一向に一切智智を志求すべきものであつて、斯の如き淨心こそ、成佛の種子現因なるを以つて菩提心爲因と云ふ。次に大悲爲根本とは、大悲 (Mahākaruṇā) は萬行にして、即ち大悲大慈の心に住して、普く佛事を成じ、之れを群生に回向して一切の苦を抜き、無量の樂を與ふる義である。此の大悲は樹根の莖葉華果を執持して、成熟せしむるが如く、大悲を根本として萬行を生ずるの義である。第



三に方便爲究竟とは菩提心を親因とし、大悲萬行を増上縁として、自證化他の方便 (upāya) 満足して、遂に無上正等覺を成じたる上、更に下轉化益の事業を爲す。果後化他の方便を云ふ。以上三句の中後の二句は菩提心爲因の句を別開したるものにして三句共に淨菩提心の具徳に外ならぬのである。

次に五轉とは發心・修行證菩提・入涅槃・方便究竟の五轉である。轉とは轉昇の義であつて、因より果に至る、五種の次第を示せるものである。是れを因・行・證・入・方便の五轉とも云ふ。發心とは菩提を求むる心を發起するなり。修行とは三密の修行にして、證菩提とは佛智の果徳を證すること、入涅槃とは佛智に依り、本不生の理を覺ること、方便

究竟とは果後化他の方便を圓滿することにして、此の五轉の中證菩提以下の三位は、三句中の究竟の句を別開せるものと見るべく、三句と五轉とは開合の不同なりとする。之れを圖示せば次の如くである。



此等三句・五轉の法門は、眞言行者自心本有の、**孔**字淨菩提心の具徳なるが故に、因より果に至るまで、刹那も其の心性を離るゝことはない。故に、『大日經住心品疏』第一に、其



の品題を釋せる文に云はく

此品統論經之大意。所謂衆生自心品即是一切智々。如實了智名爲一切智者。是故此教諸菩薩眞語爲門。自心發菩提。即心具萬行。見心正等覺。證心大涅槃。發起心方便。嚴淨心佛國。從因至果。皆以無所住住其心。故曰入眞言門住品心也。

(縮藏餘七ニ右)

と、以つて眞言行者の菩提心上轉進趣の大要を知るべし。古來此の五轉の建立に就て、中因發心と、東因發心との二義がある。中因發心とは菩提心に本有修生の二義ある中、中央大日如來の位を本有發心とし、東方阿閼佛の位を行とし、南方寶生佛の位を證菩提とし、西方彌陀佛の位を入涅槃とし、北方釋迦佛の位を方便究竟とする。本

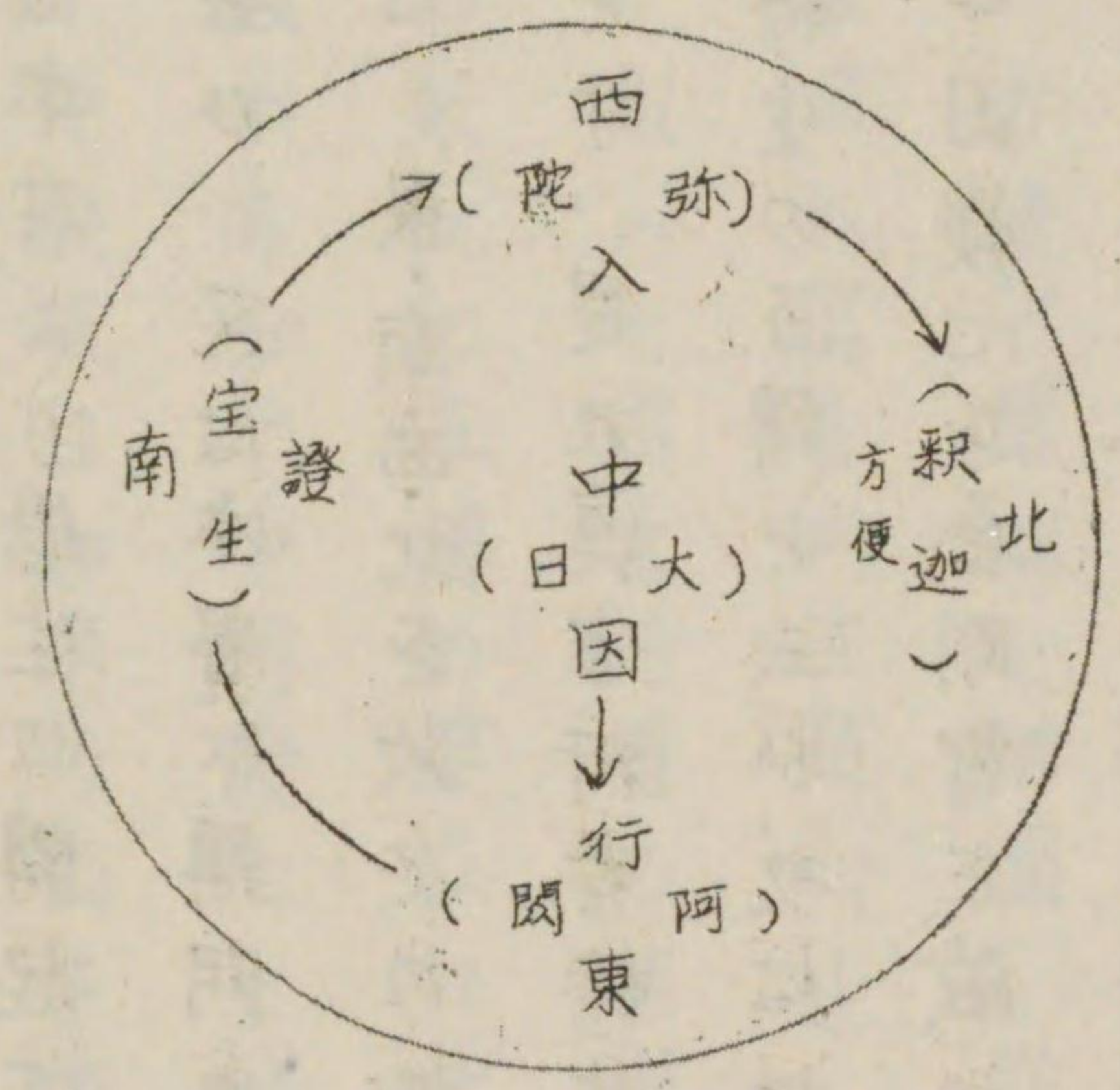
有の菩提心とは、所求の菩提心であつて本覺の智力である。此の智力緣に従つて、能求の作用を起すを始覺修生と云ふ。今は本有より修生に轉起するを以つて、本修合論の五轉と云ひ、又は本覺下轉門の五轉とも云ふ。次に東因發心とは、東南西北を次での如く因行證入とし中央を方便究竟とす。是れ眞言行者修生の菩提心轉起の行相であつて、唯修生の五轉と云ひ、又は始覺上轉門の五轉とも云ふ。

中因發心を金剛智三藏の傳と云ひ、東因發心を善無畏三藏の傳と稱す。然も兩祖何れも此の兩義を傳へざるにはあらずと雖も、且らく其の面とする所につきるか云ふのであつて、中因と東因とは一往は異りありと雖も、本覺始覺は淨菩提心の体用の別に過ぎざるを以つて、畢竟一

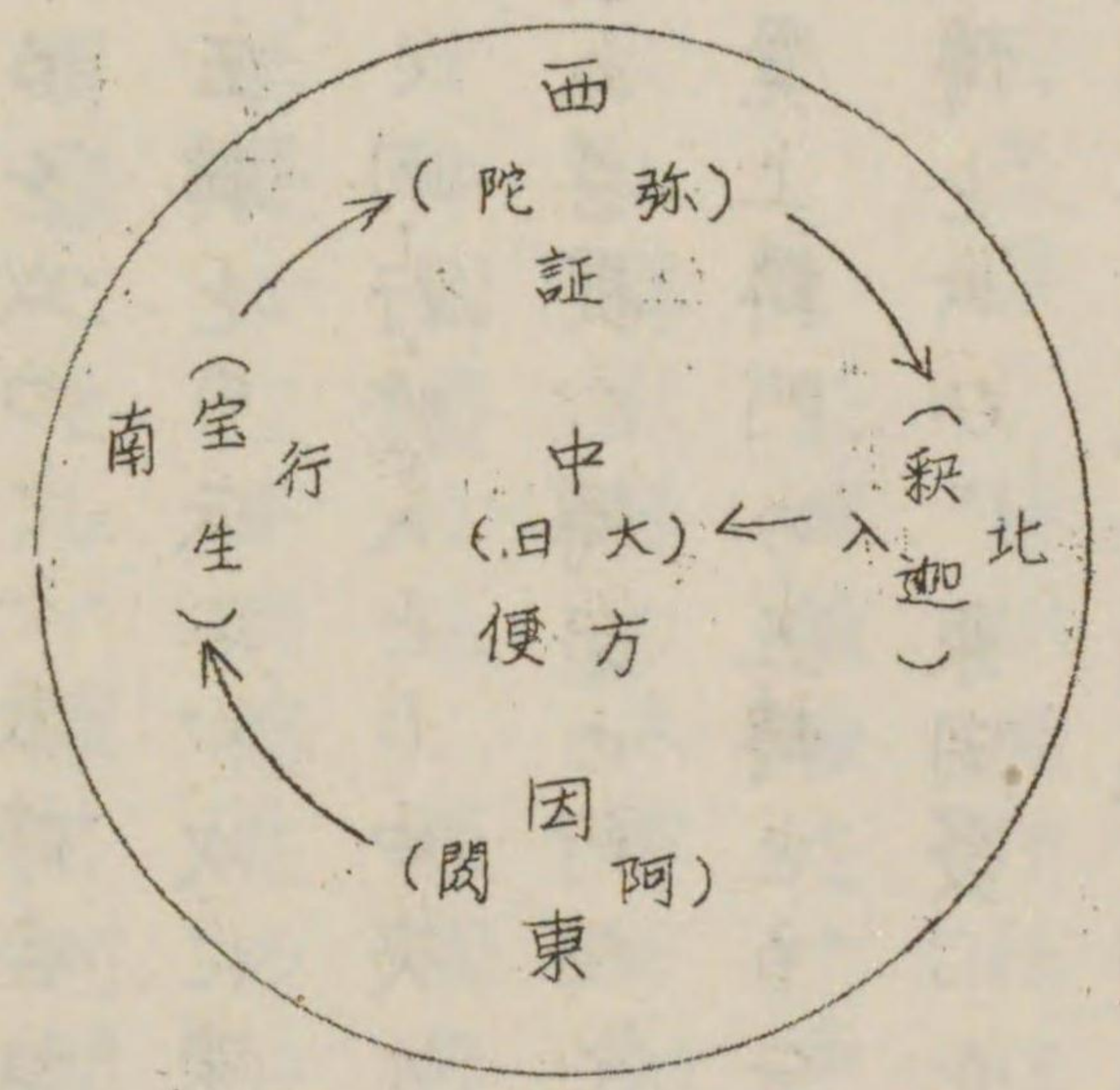


に歸すべきものである。今此の二義の五轉を圖示せば次の如くである。

中因發心



東因發心



第四節 發心持戒

第一 發菩提心

眞言門に入りて、實踐修行せんと欲する者は先づ以つて菩提提心 (Boddhi-citta) を發起せねばならぬ。菩提心とは阿耨多羅三藐三菩提を志求し、大日尊の身を證成せんと誓ひ、又は諸の佛菩薩の身を成せんと願ふ所の堅固不動の心であつて、『大疏』には白淨信心とも稱せらる。是れ實に萬行の根本にして、成佛の正因である。

菩提心の要は『發菩提心論』に謂ふ所の勝義・行願・三摩地の三種の菩提心であつて、此の中勝義の菩提心とは又深般若心とも云ひ、妙慧を以つて未極の教法を捨て、至極の法門を求むる捨劣得勝の心である。又一切諸法の、



中道實相の理を究むるが如き、是れを勝義の菩提心と云ふ。次に行願の菩提心とは、無餘の有情界を利益し安樂し、十方の含識を觀ること、猶己身の如くなる同體大悲の心を云ふ。所謂利益とは、一切有情を勸發して、無上菩提に安住せしめ、眞言の妙法を以つて、即身成佛の利益を得しむるを云ひ、安樂とは、劣機の衆生に對して布施・愛語・利行・同事等の方便を以つて、漸次に無上菩提に引進するを云ふ。次に三摩地の菩提心とは、眞言行者所入の禪定にして、凡聖不二の觀に住して、阿字不生不可得の理を悟る三密の妙行が是れである。

又高祖大師の「三昧耶戒序」には信心・大悲心・勝義心・大菩提心の四種心を説いてある。謂ふ所の信心とは

菩提心の體であつて、此の信心の徳用を分つて大悲心・勝義心・大菩提心の三心となせるものに外ならぬ。此の三心は次での如く行願・勝義・三摩地の三菩提心に當るものである。

眞言行者は、其の頭大の機に在りては、阿闍梨に遇ひ凡聖不二の教示を蒙るとき、初め發心と同時に便ち正覺を成ずることあるべきも、然らざるものは、菩提の行を修して漸次に入證するものとす。

發菩提心とは無上菩提を希ひ求むるの心を發す義なるを以つて、其の求めらるゝ者は何ぞやと云ふに、五智・三十七智等の一切智々 (Savvijñāna) である。之れを所求の菩提心と名づけ、之に對して求むる心、即ち行者の誓願



を、能求の菩提心と稱す。而も佛果の一切智々は、是れ行者本具の佛性、即ち自心の實相に外ならざるを以つて、能所共に自己の心身を離れて別に存するものではない。

## 第二 三昧耶戒

行者既に菩提心を發起せば、次に三昧耶戒を受け、之れを嚴守せねばならぬ。三昧耶 (Samaya) とは、要誓の義、戒の義、又不可越の義であつて、三昧耶戒は、真言行者の指針である。

三昧耶戒は又秘密三昧耶戒、若くは佛性三昧耶戒等と云ひ、勝義・行願・三摩地の三種菩提心を以つて戒体とし、三聚淨戒・四重禁戒等を以つて戒相とする。三聚淨戒は攝律儀戒・攝善法戒・饒益有情戒の三種であつて、

次での如く、止惡・修善・利生の三門である。此の三に

大小乗の諸戒を攝聚するが故に三聚淨戒と云ふ。四重禁戒とは『大日經具緣品』に、三昧耶の偈を説いて云はく、

佛子汝從今。不惜身命故。常不應捨法。捨離菩提心。

慳悋一切法。不利衆生行。  
(縮藏・閏二一九九)

と即ち不應捨正法戒、不捨離菩提心戒、不應慳悋正法戒、不應不利衆生行戒である。此の四重禁戒は真言行者の命根であつて、之れを守ることに、自己の身命を護るが如くすべく、若し破る者は死尸の如しと稱せられてゐる。

三昧耶戒の行相種々差別ありと雖も、通じて之れを言へば十善を出でぬのである。高祖大師の『三昧耶戒序』に云はく、



諸佛如來以此大悲勝義三摩地爲戒。無時暫忘。何故以此名戒。戒有二種。一毗奈耶此翻調伏。二尸羅翻云清涼寂靜。觀一切衆生猶如己身及四恩。是故不敢殺害其身命。觀衆生猶如己身。故不敢棄盜其所有財物。觀衆生猶如四恩。故不敢凌辱行穢。觀衆生猶如己身四恩。故不敢欺誑。觀衆生猶如己身四恩。故不敢以麤惡語罵詈。觀衆生如己身四恩。故不敢離間語。觀衆生如己身四恩。故不敢貪求所有財色。觀衆生如己身。故不敢瞋恚前人。觀衆生如己身。故不取起愚癡心行。是則由大慈悲行願故。自然離十不善心。離十不善等即是調伏戒。由離其惡心故。得清涼寂靜。是則尸羅戒。亦是饒益有情之戒。

又以深般若妙惠觀前九種住心無自性。(中略)以深般若觀無自性故。自然離一切惡修一切善。饒益自他衆生。即是三聚妙戒具足無缺。住秘密三摩地亦復如是。住此業者。以此戒檢知自身心教化他衆生。即是秘密三摩耶佛戒也。

(全集洋三三七)

と、是の文に由つて之れを觀れば、三昧耶戒は、畢竟止惡修善の大小乘の諸戒に通じ、其の根本をなすものである。故に高祖大師は、有部の諸律を三學錄に列ねて、真言宗徒の所學とし、真言行者は宜しく此の三昧耶戒を守ると共に、兼ねて顯教大小乘諸戒をも護持すべきものとせられてある。



第五節 入壇灌頂

眞言行者既に發心・受戒を終らば、次で瑜伽觀行に依つて戒體を長養せねばならぬ。修行の方法は、先づ明法の阿闍梨に就いて親しく法軌の傳授を要するものとす。此の傳法の資格に関して五種の別を分ち、之れを五種三昧耶と云ふ。『大日經第五秘密漫荼羅品』第十一に云はく  
正等覺畧說 五種三昧耶 初見漫荼羅 具足三昧耶  
未傳眞實語 不授彼密印 第二三昧耶 入觀聖天會  
第三具壇印 隨教修妙業 復次許傳教 說具三昧耶  
雖具印壇位 如教之所說 未逮心灌頂 秘密慧不生  
是故眞言者 秘密道場中 具第五要誓 隨法應灌頂

(縮藏・閏一四二九)

と、五種三昧耶は、通常尤の如く分類される。

- 第一、初見三昧耶——曼荼羅供の位
- 第二、入觀三昧耶——結緣灌頂の位
- 第三、具壇三昧耶——受明灌頂の位
- 第四、傳授三昧耶——傳法灌頂の位
- 第五、秘密三昧耶——以心灌頂の位

此の中第一の初見三昧耶は、遙に曼荼羅の諸尊、若くは繪木の形像等を禮拜し、香・華・燈明等を供養するを云ふ。現今の曼荼羅供の作法の如きが之れである。第二の入觀三昧耶は、道俗貴賤を論ぜず、曼荼羅に引入して、投華を作し、其の得佛の尊號を說示し、又は其の尊の印明を授くるが如きを云ふ。今の結緣灌頂の作法が之れである。



第一第二の三昧耶は共に結緣機の分齊なりとす。第三の具壇三昧耶は入壇灌頂して投華得佛せる行者に、有緣の尊の印明を授けると共に、具に三密妙行の法軌を傳授する。是れ弟子位に於ける灌頂にして、受明灌頂に當る。受明灌頂は又持明灌頂、學法灌頂、許可灌頂とも名づける。今日の四度加行即ち十八道法、護摩法、金剛界法、胎藏界法を實修練行せしむる分齊が之れに當る。第四の傳授三昧耶は諸尊三密の法軌に通達し、真言密法相承の師位に堪ゆる者を選び、阿闍梨の職位を紹がしむる分齊であつて、傳法灌頂に當る。第五の秘密三昧耶は特に勝れたる機根の者に授くる、秘密灌頂であつて、別に灌頂道場を設けず、以心傳心の灌頂である。然るに今日は、之れを

傳法灌頂の後に、事相の一流を傳授し其の流の最極秘事を授くる分齊とする。

此に所謂灌頂 (*Abhisheka*) とは頂に水を灌ぐの意であつて、正しくは入曼荼羅灌頂と稱する。之れを普通入壇灌頂と云ふは、壇は曼荼羅の舊譯に因るものである。灌頂の法は、元印度の風習たる、王位継承の際に於ける、帝王灌頂の儀式を採用し、之れに種々の行軌を加へて、密教特有の深旨を示したものである。即ち帝王灌頂に在つては、四大海の水を寶瓶に入れ、之れを太子の頂に灌いで、四海領掌の意を表はし、密教に在りては、如來大悲大智の五瓶水を弟子の頂に灌いで、佛種を長養せしむるのである。



灌頂の種類は、經軌の所説極めて雑多であるけれども、要は上記の五種三昧耶を以つて之れを盡くすべく、一般には結縁灌頂・受明灌頂及び傳法灌頂の三種とする。此等三種灌頂並に五種三昧耶は受者の機根の勝劣に基き、其の授法に差別あることを示すものである。又結縁・受明・傳法の三種灌頂は支分具足の事業灌頂であつて、之れを具支灌頂と云ふ。是れに對して、支分を充分に具足し得ざる、貧困の受者の爲めに行ふ灌頂を、印法灌頂と名づけ、又具支灌頂の如く、事業壇を構へざるも、器量特に勝れたる受者の爲めに、行ふ灌頂を以心灌頂と稱する。此等の具支・印法・以心の三種の灌頂は事作法の有無に由る分類である。

## 第六節 瑜伽觀行

### 第一 三密妙行

凡そ真言門の瑜伽觀行は之れを三密に攝することが出来る。『大日經疏』第一に云はく

入真言門。略有三事。一者身密門。二者語密門。三者心密門。行者以此三方便。自淨三業。即爲如來三密之所加持。乃至能於此生。滿足地波羅蜜。不復經歷劫數。備修諸對治行。

(縮藏・餘七・ニ右)

と、謂ふ所の三密は又之れを大別して、法佛の三密と衆生の三密との二種とする。法佛の三密とは四種法身・曼荼羅諸尊の三密であつて、天地間の一切の形色並に動作行爲は悉く法佛の身密、一切の音聲言語は總て法佛の語密



一切の事物理法の運行は皆法佛の心密 (Mano-guhya) である。此の法佛の三密は法佛自内證の境界であつて、等覺以還の人の測知する所に非ず、唯佛與佛乃能知之の故に密と云ふ。衆生の三密とは即ち衆生の三業である。隨緣門には衆生は惑業の故に所作悉く、生死界の業用なりと雖も、法再門には衆生の三業も、其の本性に衆徳を具へ、法佛の三密と異なることは無い。故に衆生の三業も亦密と云ふのである。今三密の妙行とは衆生本具の徳用を體現せんが爲めに、法佛の三密を規範として修行する事相即ち密儀修法にして、これに依つて法佛の三密と衆生の三密と加持感應して、一致融會すべきことを説くものである。

此の三密の行に、又有相の三密と、無相の三密との別がある。有相の三密とは『菩提心論』に  
所言三密者。一身密者。如結契印召請聖衆是也。二語密者。如密誦真言令文句了了分明無謬誤也。三意密者。如住瑜伽相應白淨月円満觀菩提心也。

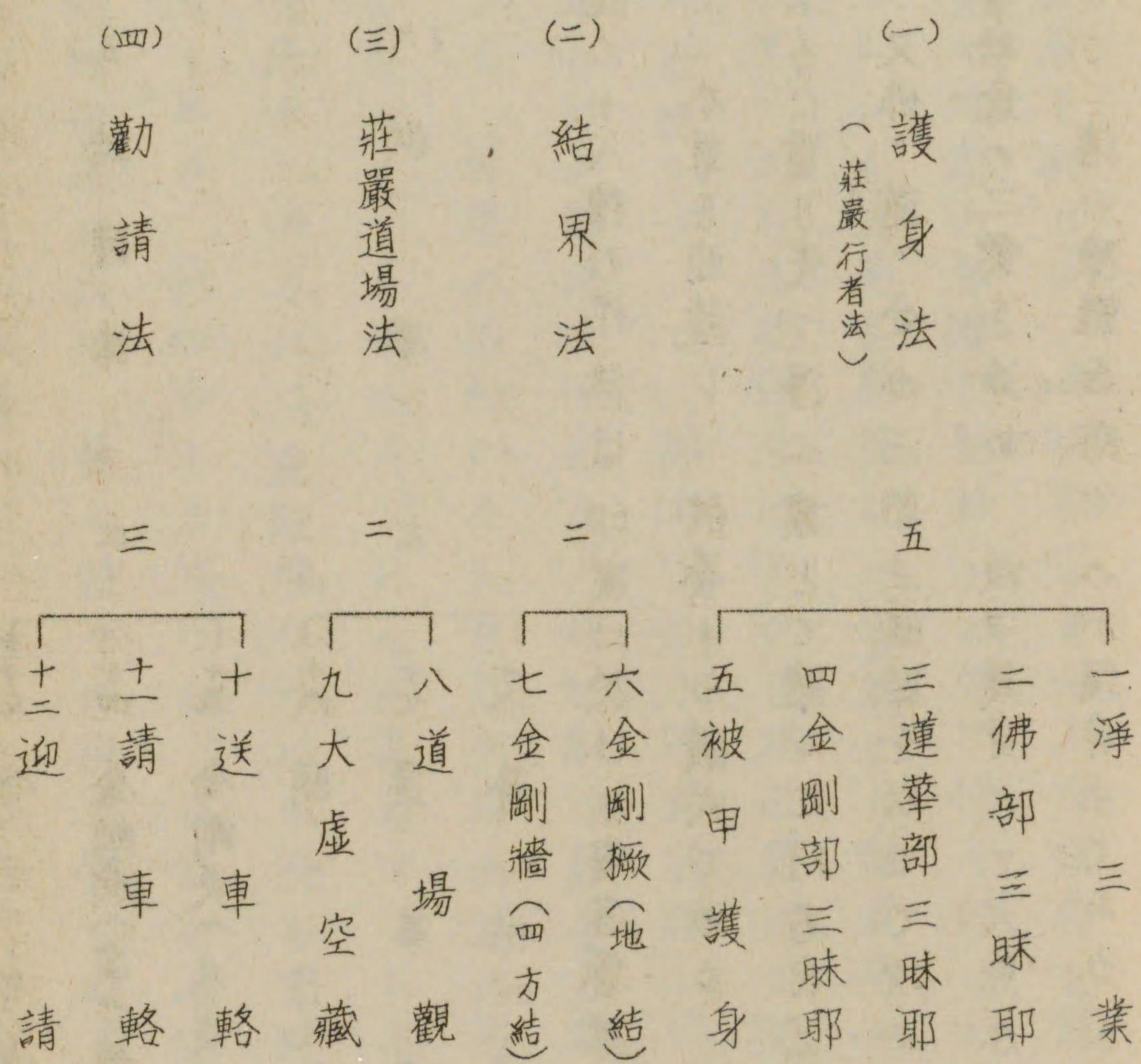
(縮藏・閏一・二〇右)

と説けるが如く、手に本尊の契印を結び、口に本尊の眞言を誦じ、心に本尊の誓願 (pranidhāna) を念じ、本尊の心と瑜伽し相感應し、以つて本尊と自己と不二一体なることを觀念修行する儀式作法を有相の三密と云ふ。此の時本尊の加被力に因り、本尊修生の三密と、行者本有の三密と感應し、凡聖此に相應涉入して、遂に行者胸中所具の



佛徳を顕現するに至り、社會人生乃至宇宙法界の實相と、全く不二一体と成り得たる境地を自證位と云ふ。是れ即ち成佛である。

眞言密教に於ける修法の結構を見るに、十八道立、金剛界立、胎藏法立、別行立、の別があつて、其の内容も廣略多岐であるが、且らく十八道立に就て其の概要を記るせば、凡そ一座の行法は前供養と瑜伽法と後供養との三段に分つべく、今十八道とはこの中前供養の十八契印に因つて名を得たものである。十八契印とは常に六法十八儀と呼ばれ身五・界二・道場二・請三・結三・供養三と略稱し次の如くである。





(五) 結護法

三

十三 辟

除

十四 金剛網(虚空網)

十五 金剛炎(火炎)

十六 闕

伽

(六) 供養

三

十七 蓮

華座

十八 普

供養

此の十八種の作法は印度に於ける賓客饗應の儀禮に準じて、本尊を迎請し、供養する儀式である。其の本尊を迎ふるに當り先づ淨三業として總じて行者自己の三業を淨め、又佛・蓮・金の三部三昧耶を以つて次での如く別して身語意の三業を淨め、被甲護身にて大慈悲の甲冑を被着して、諸の障難を防ぐのが護身法である。かくて行者の

身莊嚴を終らば、次に本尊を迎ふる道場を建立する爲めに先づ地處の基礎を堅め、又四方に牆を結ぶのが結界法で、次に正しく道場を構設し、又寶藏より幡蓋等の諸の供具を出して、之れを莊飾するのが道場莊嚴法である。次に七寶の車輅を送つて、淨土より本尊を屈請し、道場内に迎へ奉るのが勸請法である。次に教令輪身の忿怒の力用を以つて、道場の内外から大自在天等の諸の惡魔を辟除し、再び近づくと無からしめんが爲めに、上方には堅固の網を張り、四方には金剛牆の外に火炎を圍繞するのが結護法である。闕伽香水を以つて、本尊の身を沐浴し奉り蓮華の座具を設け、普く種々の供養物を献ずるのが供養法である、其の供養には、振鈴・塗香・華鬘・燒香・飯



食・燈明・讚歌等の類がある。以上十八契印の前供養が終ると、次に正しく行法の根本目的である所の、行者と本尊との三密瑜伽法を修し、次に再び後の饗應を供養し、前の結界を解き本尊を本位に奉送して、一座の行法を了るのである。

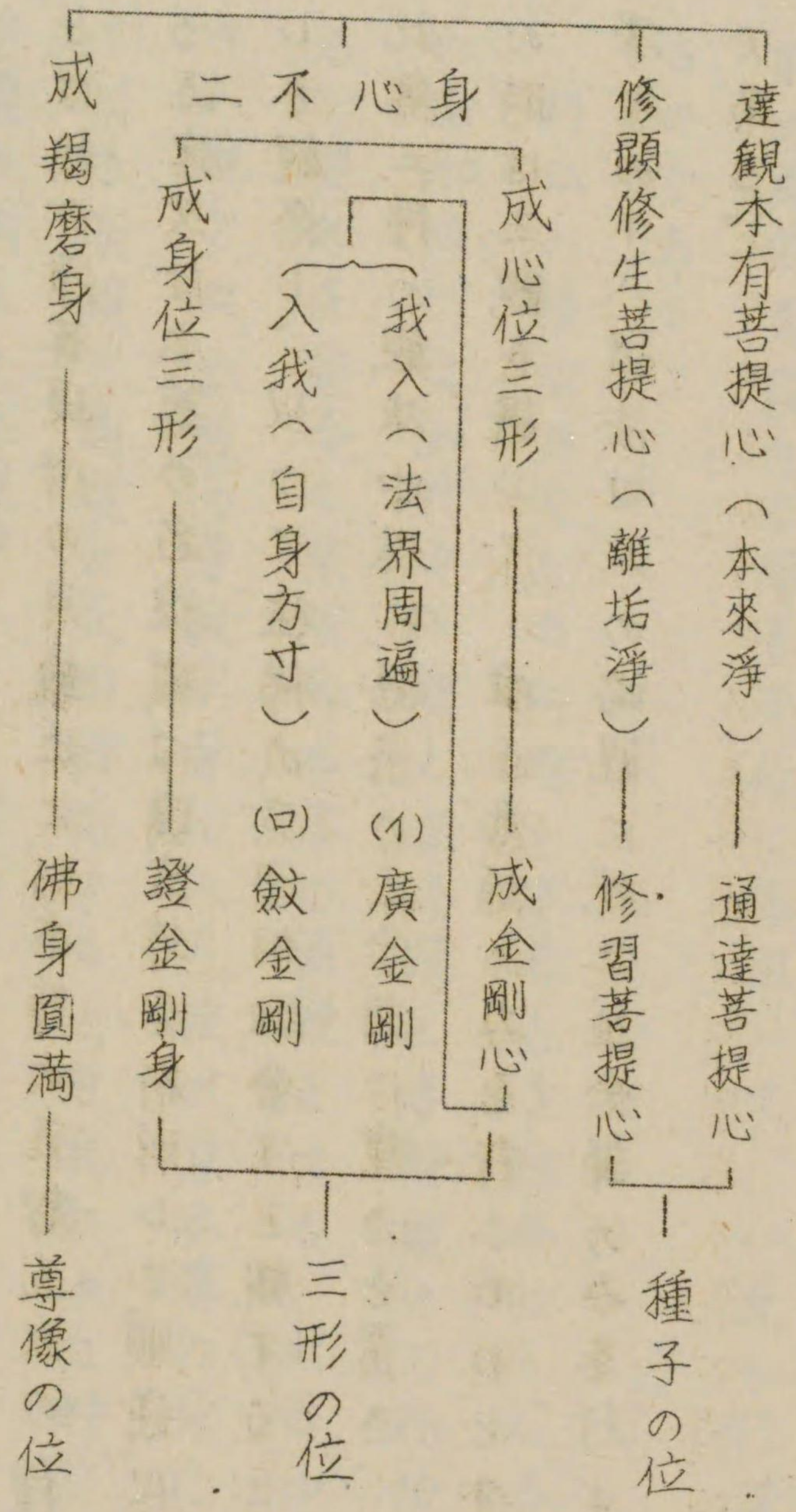
行法の根本旨意たる行者と本尊とを融合せしむる三密の瑜伽法には、入我々入觀と正念誦と字輪觀との行法がある。是れを能令三業同於本尊の通觀とする。此の中入我々入觀とは、本尊の身我が身に入り、我が身本尊の身に入りて、恰も明鏡と明鏡とを相對向するとき、其の中に映じたる影像の相互に影現涉入するが如く、生佛の身密加持涉入すと觀するを云ふ。次に正念誦とは、本尊の誦じ玉ふ真言、

我が頂より入り、我が誦ずる真言、本尊の脐輪より入り、以つて生佛の語密相一致すと觀するを云ふ。次に字輪觀とは、我が淨菩提心の月輪上に、本尊の五智五大の種子たる五字又は本尊の名號或は真言等を布列して、順逆に旋轉して觀念し、以つて生佛の意密相融會すと觀するを云ふ。此等三種の觀法中殊に語密の正念誦に重きを置き、略觀の時は三觀を攝して、唯正念誦のみを行ふものとす。廣澤方の十八道法は此の略觀に就き、正念誦のみを行ずる習である。

此の入我々入觀と、正念誦と、字輪觀との三種の通觀に對して、又別觀として横豎の兩觀がある。豎觀は五相成身觀と云ひ、通達菩提心・修菩提心・成金剛心・證金剛心身・佛



心身 心円満之れである。此の観法は金剛界法の行用にして即身成佛の要道頓證菩提の秘法なりとす。今其の要旨を圖示すれば次の如くである。



横観は五輪成身観、又は五字嚴身観とも云ひ、胎藏法の行用である。此の観法は行者の身分に五輪又は其の種

子たる五字を布置して、我が身即ち五輪法界率都婆なりと観念するものとす。

次に無相の三密とは、高祖大師の『大日経関題』に

開口發聲真言滅罪。舉手動足印契增福。心之所起妙觀

自生。意之所趣等持即成。 (全集洋一六五九)

と釋され、又興教大師の『五輪九字秘釋』に

舉手動足皆是密印。開口發聲悉是真言。所有心念、自三

摩地。 (興教大師全集二三)

と示されたるが如く、平素任運に阿字本不生の真理に住するを云ふ。真言行者若し能く有相の三密行に依つて、修練の功を積み、佛と交融冥契するに至れば、自然に大悲化他の業用を起し、日常に於ける一切の身業、一々の語



業、念々の意業その儘悉く佛界高妙の三密と成り理想的生活を  
行ふことが出来得るに至る。是れを無相の三密と云ふ。眞言行者は初習業の位には有相の三密を修し、久習業の位には自ら無相の三密に入るものとする。

次に先に掲記せる『大日経疏』の「入眞言門略有三事」の文に就き、眞言行者は必ず三密の行を具に修せざれば成佛すること能はざるや、或は其の機欲に由りて、一密二密の修行にても成佛し得るやは古來の異義であつて、古義派の學匠は多く佛教元來の理想たる三業兼備の思想に基づき即身成佛の正機は三密双修を要すと立て、之に對し新義派に於ては、聖憲師は三密双修と云ふは、顯密對辯に依る一往の義門にして、若し細論するときは機根萬差

の故に劣機の中には、行者の意樂に隨つて簡明な一密二密の易修易行に依る成佛の機もあるべしと建て、興教大師の『五輪九字秘釋』に即身成佛の機を説ける中に「隨於一密至功行」と云ふを證とせり。「隨於一密至功行」とは『秘釋』に次の如く釋されてある。

設無餘二行及廣智。唯觀一義解一法。至心修行故即身成佛故。設且無二法智慧及餘二行。唯以信爲門。觀一字形成佛。觀一印形三摩耶形成佛。觀二尊形相之一相而成佛。及無餘行。唯誦一明一字成佛。並結印契。且無餘密行。唯相應必定即身成佛故。總云再也。

（興教大師全集四一）

茲に一密成佛と云ふも、單なる一密には非らずして、結



局は三密具足を理想とする三密平等圓融無尋の一密たるは論を俟たぬのである。

## 第二 阿字 觀

阿字觀は又阿字月輪觀と云ひ或は淨菩提心觀、一体速疾力三昧等とも云ふ。凡そ真言密教の行法は、金胎兩部の大法或は諸尊法等其の種類重々なりと雖も、悉く阿字觀の廣略とも見るべく、阿字觀は最も重要たる觀法にして、上根勝慧の者は之れに依りて、現身に本尊の覺位を成すべしと雖も、下根劣慧の者は普通三密修行の訓練として、此の阿字觀を修するのである。今其の大綱を記るさば、菩提心論に云はく

夫阿字者一切諸法本不生義(細註略)。即讚阿字是菩提

心義頌曰。

八葉白蓮一肘間

炳現阿字素光色

禪智俱入金剛縛

召入如來寂靜智

扶會阿字者。楷定決定觀之。當觀阿明淨識。若纔見者則名見真勝義諦。若常見者則入菩薩初地。若轉漸增長則。廓周法界。量等虛空。卷舒自在。當具一切智。

(縮藏閔一〇右)

と阿字觀の要旨は阿字と蓮華と月輪とを觀するに在る。阿字は菩提心の種子であつて正しく所觀の本尊であり、行者本有の淨菩提心である。蓮華と月輪とはその三形である。蓮華は理を示し、月輪は智を表はす。阿字の觀想法に聲と字と實相との三種がある。聲とは出入の氣息に



従つて阿の聲を唱ふるを云ひ、字とは阿字の字相を觀ずるを云ひ、實相とは阿字の字義即ち本本生不可得の理を觀ずるを云ふ。

阿字觀の方法には廣略の別がある。廣觀は行住座卧に常に口に阿字を唱へ、對境悉く阿字なりと觀ずるものにして、略觀は一定の法則に依つて之れを觀ずるものである。其の法則も諸流の相傳區々であるが、今實慧大徳等の口訣に基づき其の一端を述べれば、先づ靜寂にして、明暗適度の處を擇んで、修禪の室と爲し、其の一方に高さ約三尺程の位置に阿字觀の本尊圖を懸ける。此の本尊圖は、金剛界法に依れば、輕霧の中に大さ徑約八寸の月輪中に八葉の蓮華を描き、其の上に金色又は黒色若くは白色の𠵼

字を書く、若し胎藏法に依れば、蓮華の上に月輪を描き、其の中に𠵼字を書く、本尊の前面には尺妙香のみを薫し、簡素清淨ならしむ。而して行者は此の本尊の前方約四尺程、隔りたる處に厚く座物を敷き、其の上に結跏趺坐、又は半跏趺坐にて正身端坐し、常に臍下丹田に力を入れ、耳と肩とを等しく、鼻と臍と等しく、眼は半開にして瞬かす鼻柱を守るべし。次に護身法、發菩提心、三昧耶戒の印明を結誦し次に定印を結び靜かに深呼吸を行ふこと數回して心身の動搖を靜めたる後、正しく𠵼字を觀ずる。即ち自身と本尊と一切衆生と是の三、無差別なりと觀ずるのである。其の阿字を觀ずるに當り、初心の者は最初より阿字の實相を觀ぜんとせば、却つて困難なるを以つて先づ



聲字を觀じ、功積みて後実相を觀ずるを可とする。即ち目を開きては、有相の本尊を觀じ、目を閉じては自己胸中の阿字を觀ずる。かくして有相の本尊圖の形量を次第に舒べて之れを觀じ、遂には天地法界に遍滿するに至らしむると共に、又之れを卷いて自己心中に召入して、本來所具の阿字に融會せしむる。かくして觀行成熟すれば、本尊の阿字と自身の阿字と、不二一体と成り天地法界凡て是れ一阿字と成るに至るべく、之れを阿字瑜伽の悉地と名づけるのである。一座の阿字觀は二十分乃至四十五分を程度とし、又一日の回数は一回以上四回以内とし、一座の觀法終らば護身法を解き、大悲心に住して下座するものとす。

此の阿字觀のとき、その觀法の一過程として、其の三形た

る月輪のみを觀ずるを月輪觀と云ふ。即ち自心の淨菩提心は、滿月輪の如く圓明無垢にして、其の光明法界に周遍すと觀ずる法であつて、其の方法は阿字觀に準じて之れを知るべく、新月より十六日の滿月に至るまで、十六大菩薩の徳を漸次に開發して、遂に佛果に到達すと觀ずるのである。『菩提心論』には次の如く説かれてある。

一切有情於心質中有二分淨性。衆行皆備。其體極微妙。皎然明白。乃至輪迴六趣亦不變易。如月十六分之一。凡月其一分明相。若當合宿之際。但爲日光棄其明性。所以不現。後起月初日日漸加。至十五日圓滿無礙。

(縮藏・閏二〇右)



### 第三 護摩法

真言密教に於ける諸尊の行法には大抵護摩法を附するを例とす。護摩 (Homā) とは梵語であつて焚焼と譯す。是れ爐中に火を焚き供物を其の中に投じて諸神に供養せんとする、外道の護摩法に起源するもので、婆羅門教に於ては火を神格せる火天 (Agni) を媒介者として、梵天等の諸神の口に供物に捧げ、以つて種々の福樂を求めんとしたのであるが、此等外道の徒を佛道に方便引入せんが爲めに、其の護摩法を採用して、火の自性を以つて如來の一切智光となし、實相の智火を以つて煩惱業苦の薪を燒盡し心解脱を得るの義としたものである。

此の世間外道の護摩を外護摩と云ひ、出世間佛道の護摩

を内護摩と云ふ。その内護摩を又二種に分けて實際に造壇して供物を焚焼する事作法を行じて、行者の三業の罪苦を淨むるを事護摩と名づけ、行者の觀想上に於て身を壇とし、口を爐とし、觀心の智火を以つて、煩惱妄想をそのまゝ三十七尊の功德相と開現するを理護摩と稱する。事護摩と雖も本尊と爐と行者と三平等の觀に住し、事理相應せしめ爐口に粗細の煩惱を燒盡するのである。又修法の目的に依つて護摩法を分類して、息災・增益・調伏の三種法とし、其の增益を增益・敬愛に開けば四種法となり、更に鈎召を加へて五種法ともする。又念誦法即ち供養法と護摩法とを同一の壇に於て行するか別壇に於て修するかに依り、即壇護摩と別壇護摩の別がある。普通諸尊の



護摩は供養法護摩合壇の作法なれど、後七日御修法並に灌頂等の大法には別壇護摩を用ゐる。又供養の段數に依つて一段護摩乃至九段若くは十一段護摩等の不同があるが、多くは五段法を用ひ、極略には一段に他の諸段を攝した、一段盡諸段護摩法を修することもある。

#### 第四十 緣生句

十緣生句とは、從緣生の十種の句の意にして、又十喻觀とも云ふ。十種の遮情の觀門である。「大日經住心品」に曰はく、

秘密主。若眞言門修菩薩行諸菩薩。深修觀察十緣生句。當於眞言行通達作證。云何爲十。謂如幻陽焰夢影乾達婆城響水月浮泡虛空華旋火輪。(縮藏・閏・一三右)

と、「大日經」は三句の法門を以つて宗要とし、その三句の義を更らに明かにする爲めに、秘密主が、九つの問を發し、如來これに答へ給へる九句の法門の中、第七修行の門に對する答説が、此の十緣生句である。即ち眞言行人の三密の妙行に於て、因より果に至る迄、所緣の境に對して、情執を打破して、大空三昧を證する方便觀である。此の中一に幻(Maya)とは、幻術師が幻作する種々の相貌を云ふ。二に陽焰(Marici)とは、熱風塵等の因緣によつて曠野の中に現する、水相等を云ふ。三に夢(Svapna)とは、睡眠中に見る種々の境界を云ふ。四に影とは又鏡像(pratikimda)とも云ひ、鏡中の影像を云ふ。五に乾達婆城(Gandharvanagara)は又尋香城とも稱し、日光初め



て出づるとき、大海中に城門宮殿等を現じ、行人の出入するが如き相を見る蜃氣樓の類を指す。六に響(*pratisuśra*)とは、谷響、又は應聲とも云ひ、峡谷等に於て、聲に應じて、生ずる反響音を云ふ。七に水月(*udbhāsamudra*)とは、水中に映ずる月影を云ふ。八に浮泡(*Budhuda*)とは、水の上に生ずる泡沫を云ふ。九に虚空華(*Khayaṣpa*)とは、眼膜の爲めに空中に見ゆる華の如きを云ふ。十に旋火輪(*Akṣarakaṣa*)とは、手に火燼を採りて、施轉するとき生ずる輪像を云ふ。以上は是れ皆縁生無自性にして、其の實體不可得なるに喩へたものである。

大日經疏<sup>四</sup>第三に依れば、此の十喩の縁生無性觀に、即空・即心・即不思議の三種の別を明してある。今且らく

初の幻喩の觀について、此の三種の相を述べれば、第一に即空幻とは又即蘊幻とも云ひ、五蘊の法の縁生無性なること幻の如しと悟るを云ふ。初劫所觀の境である。第二に即心幻とは、萬法は唯心の所變なりと觀じ、諸法の當體そのまゝ、一心の影像なりと了知するを云ふ。第二劫所觀の境である。第三に即不思議幻とは、即心幻に於て一心を本とし、影像の萬法を末とし、性空の體を心の實際なりと執滯するとき、心の實際も亦幻の如く不可得なりと觀じ、色心不二絶對一實にして、**无**字本不生なりと覺るを云ふ。是れ凡夫の情慮を超ゆるが故に、不思議幻と名づく。第三劫所觀の境である。此の十縁生句は地前因位の心垢對治の觀門であるけれども、果位にも通ずる



ものとする。此の十縁生句は般若經並に中觀の思想を承け、更に頼耶縁起の思想をも取り入れて、之れを止揚したもので、<sup>『大日經疏』</sup>にも<sup>『智度論』</sup>等の文を引いて、十喩を釋してある。十喩は廣く諸般若等に掲ぐる所であるが、其の所說必しも同一ではない。<sup>『大品般若經』</sup>第一には<sup>『大日經住心品』</sup>の十縁生句の中浮泡と虚空華と旋火輪とを除いて、虚空(*akāśa*)と影(*pratibhāva*)と化(*vismṛta*)とを加ふ。虚空とは空間を指し、影とは光影とも云ひ、鏡中の影像とは異なる。光映すれば現はれ、映せざれば無きを影と云ふ。化とは神通力を以つて諸物を变化する等を云ふ。高祖大師は天長四年<sup>『詠十喩詩』</sup>一篇を作り、下野那須郡の僧廣智禪師に贈り、此の十喩詩は「修行者之明鏡求佛人之舟筏」なりと説き示されてゐる。

## 第七節 發趣階位

### 第一 三劫・六無畏

眞言宗義の本旨からすれば、其の東因發心たると、中因發心たるとを問はず、因より果に至るまで、皆生佛不<sup>二</sup>、迷悟一如の境界にして、其の間修行の階位を論ずべきものなしと雖も、行者をして修證の淺深を知らしめんが爲めに、假りに無階の處に階級を設け、三劫・六無畏等の名を立て以つて趣入の分滿を定め淨菩提心鍊磨の明鏡とす。三劫・六無畏は共に<sup>『大日經第一住心品』</sup>の所說である。

三劫とは既に「即身成佛」章に於て述べたるが如く、眞言行者の因より果に至る間に超越すべき妄執に、初劫



麤妄執・第二劫細妄執・第三劫極細妄執の三重の別あるを云ふ。劫は妄執の義にして時分の義にあらずとする。此の中初に麤妄執とは、人執品の惑であつて、人無我の理を知らず五蘊假和合の我体を實有と執し、自他の差別を存する妄心なり。真言行者瑜伽の觀行に於て、無性の相を知り寂然界を證する位にして、顯教の二乗の聲聞・緣覺の斷惑に齊し。第二に細妄執とは法執品の惑にして、法無我の理を知らず五蘊の法體を實有なりと執する妄心なり。真言行者瑜伽の境界に於て皆是れ唯心の影像なりと悟る位にして、顯教の三乗の菩薩の斷惑に齊し。第三に極細妄執とは無明品の惑にして一切の法に於て能所ありと執し平等法界と相違する妄心なり。真言行者諸法皆

孔字門に入ると覺る位にして、顯教の一乗の菩薩の斷惑に齊し。

六無畏とは善無畏・身無畏・無我無畏・法無我無畏・一切法自性平等無畏是れなり。無畏とは梵語に阿濕縛娑 (Aśīṣa) と云ふ蘇息處と譯す。一切衆生は迷界に沈淪して死滅するに似たり。今此の六處の觀行に依つて業煩惱の厄縛を脱れ蘇息を得るが故に無畏と名づく。先づ初に善無畏とは真言行者初めて三昧耶戒を受け三密妙行を授かりて菩提心を發起する位にして、世間の凡夫善心を起して五戒十善等を持して三途の苦を離るゝ位に齊し。第二に身無畏とは真言行者有相三密の觀行稍熟して壇上に於て本尊の衆相現前する有相の悉地を得る位にして、聲聞の不淨



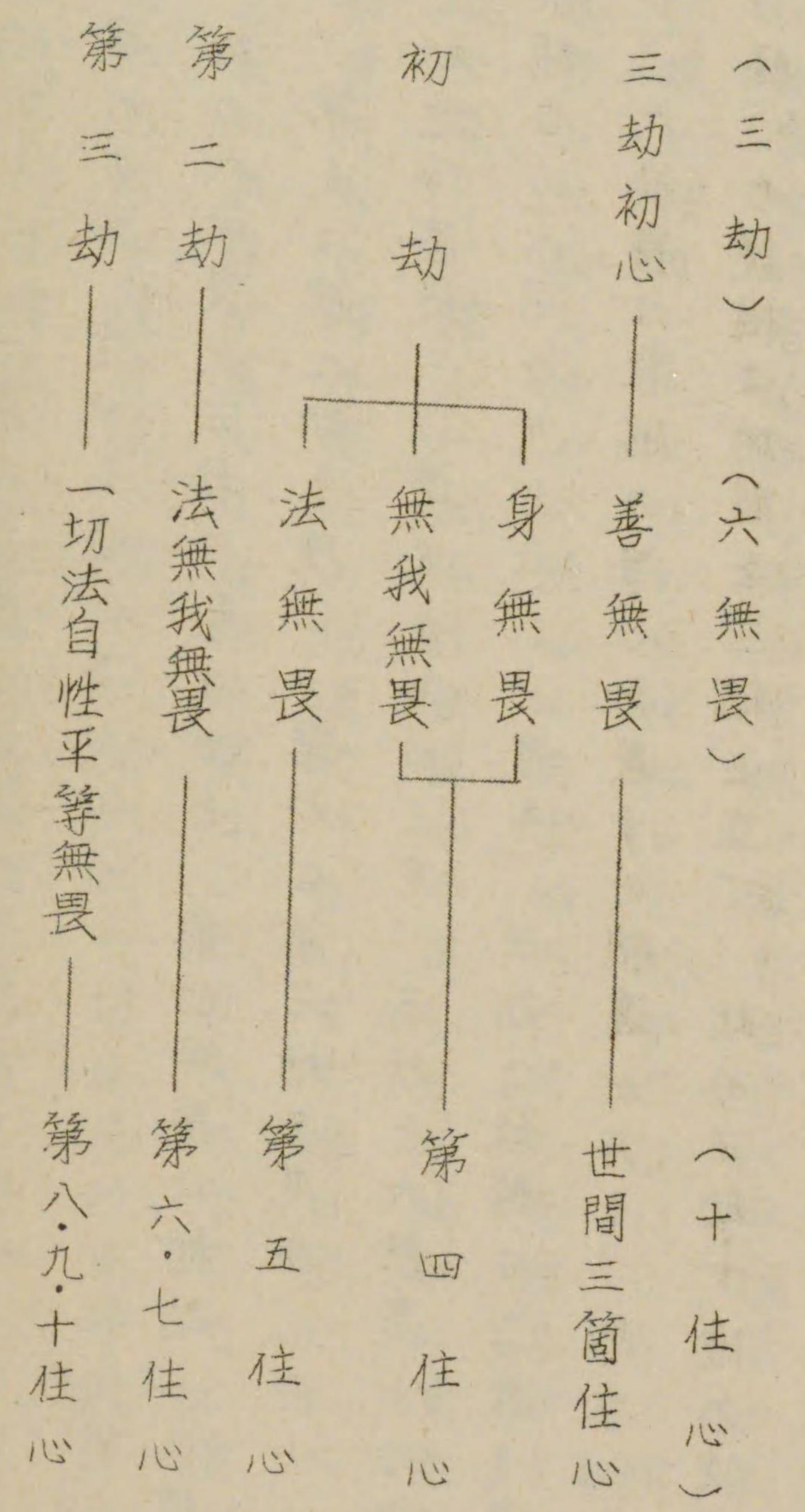
觀等を修して身の厄縛を脱する位に齊し。第三に無我無畏とは真言行者有相悉地に對して十喻の觀智に依り、愛著心を生ぜず心平靜なる位にして、聲聞の人無我の理を證し、我執を離れ心清涼を得る位に齊し。第四に法無畏とは真言行者瑜伽の境に所現の境界は皆水月・鏡像の如く因縁の所生にして其の自性無しと觀ずる位にして、彼の緣覺の五蘊の法を分拆して自性無きを了し法執を斷ずる位に齊し。第五に法無我無畏とは真言行者瑜伽の境界は畢竟行者の淨菩提心の功德に外ならずと悟る位にして、三乘の菩薩が萬法は唯識所變にして其の体空なりと證り心の自在を得る位に齊し。第六に一切法自性平等無畏とは真言行者諸法本不生不可得の理に体達し無分別に住す

る位にして、一乘の菩薩が萬法の一實眞如を了して色心平等の法界に住する位に齊し。

此の六無畏を三劫に配すると、前四無畏は初劫中に開き、第五は第二劫を度し、第六は第三劫を度す。此くして初地淨菩提心に達するものとす。三劫と六無畏とは古來開合の不同なりと云ふと虽も、三劫は所越の妄執を表し、六無畏は能越の淨心を表すの相違がある。即ち『大日經』の説相は地前を三劫と立て、此の三劫十地の次第にて地前に三劫を斷ずと立つ。此の三劫に於て真言行者所得の功德を差別して六無畏を建てたものである。此の三劫・無畏を釋するに、真言行者の位階に約するは、能寄寄の方面よりせるものにして、顯教の行相に約するは所



寄齊の方面よりせるものとす。然るに高祖大師は此の三劫・六無畏の經文に依りて十住心を建立せられたのである。今三劫・六無畏・十住心の關係を图示すると次の如くである。



第二 十地・十六生

眞言行者断惑證理の次位に就き、『大日経』には十地と説き、『金剛頂経』には十六生と明す。

先づ十地とは歡喜地・離垢地・發光地・焰慧地・難勝地・現前地・遠行地・不動地・善慧地・法雲地是れなり。此の十地は行者所證の地位にして十地の能く佛智を生成し住持すること、大地の萬物を生成し、荷負するが如くなるを以つて地と云ふ。十地の名義に淺略深秘の両意あり。淺略の義は常途顯教の所説に順じて之れを知るべし、即ち十地の一々に一波羅蜜を成就して次第に進趣し、更に等覺を経て佛果を證する地々遷登の十地なり。即ち初歡喜地とは又極喜地とも名づけ、檀波羅蜜を成就し見惑を断じて中道



の理を證し、初めて無漏の聖位に入りて大法悦を生ずる位なり。二に離垢地とは又無垢地とも名づけ、戒波羅蜜を成就し修惑を断じて、無始以來所犯の罪垢を離れて身心清淨を得る位なり。三に發光地とは又光明地・有光地等と名づけ、忍辱波羅蜜を成就して本覺の慧光顯發する位なり。四に焰慧地とは増焰地とも名づけ、精進波羅蜜を成就し智慧の焰愈々増盛する位なり。五に難勝地とは又極難勝地とも名づけ、禪定波羅蜜を成就して極めて難勝なる真俗二諦不二の理を證得する位なり。六に現前地とは又現在地とも名づけ、智慧波羅蜜を成就し、最勝智を現前する位なり。七に遠行地とは又深遠地とも名づけ、方便波羅蜜を成就し、大悲心を發して自利の行を遠離する

を云ふ。八に不動地とは願波羅蜜を成就し無分別智常に相續して動せざる位なり。九に善慧地とは又善相地とも名づけ、力波羅蜜を成就し、四無礙辯を得て巧に說法する位なり。十に法雲地とは智波羅蜜を成就し、無辺の巧徳を具足して慈雲の如く普く法界を覆ひ、衆生を利潤する位なり。又深秘の十地とは自宗の實義にして、法身如來所具の功德を別開せる位にして、既に煩惱を断盡せる位なれば、十地各々高下の差別あることなく、所謂初地與十地無高下の故に各々の地位に各々の十波羅蜜を成就するものとす。是れ『大日經』所説の十地である。

次に十六生とは十六大菩薩生の義にして、此の生は功德生にして果報の生を云ふにはあらず。真言行者が十六



大菩薩の功徳を自身の上に觀修し發生するを云ふ。此れ  
初歡喜地の上の功徳生にして、眞言行者は十六大菩薩の  
自證化他の功徳を此の現世一生の中に成就して究竟正覺  
の位を得るものとす。故に「金剛頂瑜伽修習毘盧遮那三  
摩地法」に

若有衆生遇此教。晝夜四時精進修。現世證得歡喜地。

後十六生成正覺。

(縮藏聞ニ八八七)

と説けり。「此教」と云ふは金剛頂瑜伽の三摩地法を指  
す。又「歡喜地」は淺略の歡喜地を指すにはあらず、自  
宗不共の初地即極の深秘の初地なり。「後十六生成正覺」  
とは十六大菩薩の功徳を円滿に發生すれば第十六菩薩の  
位に於て大覺位を成ずるの意なり。

所謂十六大菩薩とは金剛界曼荼羅の四方四佛の各親近  
の菩薩にして、四佛四智の徳を別開せるもの、又是れ眞  
言行菩薩の進修の位次を表はすものなるを以つて、定徳  
の尊に對して慧門の十六尊と稱す。十六尊の中先づ東方  
阿閼佛の四親近は菩提心の功徳なり。菩提心の堅固不動  
なるは金剛薩埵、是れに衆生攝引の徳あるは金剛王(鈎王)  
菩薩、利他の徳あるは金剛愛菩薩、利他に依りて自他共  
に歡喜するは金剛喜菩薩なり。此等の四菩薩は大菩提心  
を發起する位にして、總じて三昧耶の薩埵とも稱す。次  
に南方寶生佛の四親近は福德莊嚴の功徳なり。善根等の  
福德を一身に聚め是れを莊嚴するは金剛寶菩薩、其の福  
徳具足と共に衆生の信任を得威光を發するは金剛光菩薩、



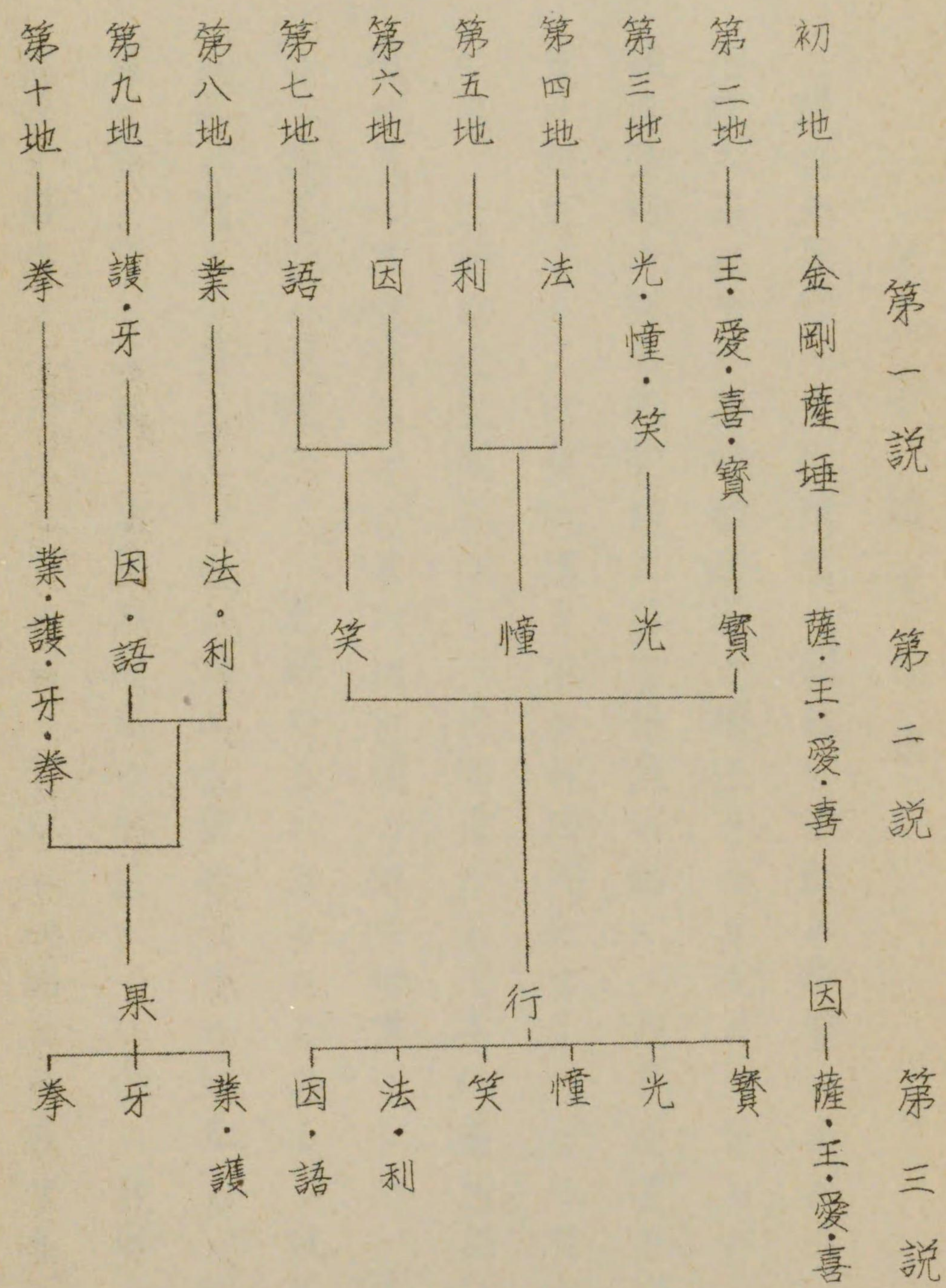
自ら得たる福德を恰も如意寶の願に従つて萬寶を雨降らす  
すが如く、他の乏しき者に施與するは金剛幢菩薩、斯く  
して自他共に福德の充實を喜悅微笑するは金剛笑菩薩な  
り。此等の菩薩は福德の莊嚴によりて、威光を増大する位  
にして、總じて福德聚の薩埵とも云ふ。次に西方の弥陀  
佛の四親近は智慧門の功德なり。正しく一切法を觀察し  
て自性清淨 (Svalbhavasiddhah) なりと照見する方便智を  
得るは金剛法菩薩、此の正智の利用に依りて煩惱習氣を  
断除するは金剛利菩薩、又此の智を以つて諸法實相を觀  
察し説法教化の因とするは金剛因菩薩、又此の智を以つ  
て衆生の爲めに正しく真言の法門を宣説するは金剛語菩  
薩なり。此等の菩薩は主として正智を開顯する位にして、

總じて智慧門の薩埵とも名づく。次に不空成就佛の四親  
近は大精進の功德なり。既に福德智慧を具足せるを以つ  
て是れを心身の上に實行するは金剛業菩薩、其の實踐に  
當り懈怠等の障礙を防護するは金剛護菩薩、更に剛強の  
障礙苦難をも能く之れを對治するは金剛牙菩薩、是れ等  
の實踐窮行に當りて身語意業能く相應し恒に二利の事業  
を成弁すべく勇猛精進するは金剛拳菩薩なり。此等の菩  
薩は正しく佛作佛業を精進實行する位にして、總じて大  
精進の薩埵又は大事業の薩埵とも云ふ。

此の十地・十六生は若し十住心に約するときは第十住心  
の分齊である。又十地と十六生との關係を見るに、十地  
は法に就きて之れを立て、十六生は人に就きて之れを建



たるものにして、十地と十六生とは開合の不同なりと稱せらる。されど其の生地の配釋に就ては古來種種の異説あり。第一は『金剛三昧經』の説、第二は果寶の『即身義東聞記』の説、第三は興教大師の『西界愚按鈔』の説なり。古義派は第二説を依用す。今之れを圖示すると次の如くである。





#### 第八節 鎮護國家

護國の思想は支那隋唐の國家的佛教の影響に由來し、聖德太子以來日本佛教建設の核子をなすものであるが、殊に高祖大師立教開宗の真言密宗の如く、即事而真を宗義の根底とし、即身成佛を宗旨の目的とするものに在りては、世間即出世間にして、世間道たる忠孝仁義乃至社會公共の事業等はそのまゝ、出世間の佛作佛業にして、眞言行者不斷の理想たり、悲願たるべきものである。我等は此の國土を棄てて、他に淨土を求むべきではなく、我等の身を置く處即ち密嚴佛國なるが故に、社會に貢獻し、國家を鎮護する所以のものは、皆此の佛國を莊嚴するが爲めの努力であり、諸種の加持祈禱・護摩法乃至護國の修



法等は悉く現在の國土を淨化して、佛陀の淨刹と成し、四海の同胞を誘引して曼荼の聖衆たらしめんとする真言宗義の實踐に外ならぬのである。

真言密宗より觀るときは、日本の國體は即ち佛・菩薩の充満せる一大曼荼羅であつて、萬世一系の天皇はその曼荼羅の中心本尊たる普門總德の大日如來にましまし、國民は又天皇の御威徳を荷負し奉る一門別徳の諸尊に相當するのである。天皇を大日輪と觀奉れば、國民はその四方に輝く光明とも云ふべく、彼の皇室の御紋章たる十六葉複瓣の菊花は日本の國體を表象せる三昧耶曼荼羅と拜され、集合花たる菊花の周圍の花の第一重の十六葉は薩王・愛喜等の慧門の十六大菩薩とせば、第二重の十六葉は四

母八供・四攝等の定門の十六尊にして、此等の諸菩薩が中心の花たる大日如來の徳相を分擔し、内外合して一體となつてその威光を倍增せるが如く、億兆の臣民心を一つにして、遠く皇祖皇宗の御心を御繼承し給ふ天皇の御威徳を分擔し奉り、上下君民その體を一つにし、以つて皇室の尊嚴を維持し、國體の精華を發揚して今日に至つて居るものであると解さるのである。斯くして君臣一家の國體なるが故に、真言密教に於て後七日御修法を始め其の他仁王經法守護經法・太元帥法・二閻觀音供等の鎮護國家の法を修するに當り、玉體加持・御衣加持・香水加持等を行ひ、先づ以つて玉體安穩・寶祿長遠を祈念することは、やがて國體鞏固・萬民豊樂・天下泰平・五穀豊饒の祈願となり、



至尊に對する加持は、その儘國家國民への祈禱となるのである。

高祖大師は皇室より東寺を下賜さるるや、仁王護國經の意に依つて寺名を教王護國寺と改め、高雄山神護寺を和氣氏より付屬せらるるや、是れ亦神護國祚真言寺と呼び、以つて鎮國念誦の道場と爲し、弘仁元年十月「奉爲國家請修法表」を朝廷に上りて

其所請來經法中。有仁王經守護國界主經・佛母明王經等念誦法門。佛爲國王特說此經。摧滅七難調和四時。護國護家安己安他。此道秘妙典也。

(全集洋三三四三六)

と述べて、不壞の信念と無比の誠志とを以つて仁王經の

大法を修したるを始めとし、再來平城嵯峨淳和仁明の四朝に亘りて、鎮護國家の爲めに建壇修法せらるること五十箇度に及ばれ、その最終が御入定に近く、承和二年正月宮中に於て初めて行はれた後七日御法であつたのである。此の如く高祖大師は鎮護國家・寶祚無窮の祈願を凝らさるると共に、又一面には我が國文化開發の爲めに、いろは歌を作り、五十音圖を製し、書道に一流を開き、繪画彫刻の勃興を促かし、綜藝種智院を設けてはその式文の中に

絳帳先生心住慈悲思存忠孝。不論貴賤不看貧富。隨宜提撕誨人不倦。三界吾子大覺師吼。四海兄弟將聖美談。不可不仰。



と述べて教育の機會均等真俗不離を標榜し、又山野を拓き、沼澤を鑿ち、交通を便にして殖産興業の進展に貢獻せらるる等其の生涯を通じての経世利民の活動は、總て高祖大師の餘技にはあらずして、皆是れ此土即淨土、即身成佛の大信念を實踐し、以つて佛恩を一切衆生に光被せしめんが爲めの施設に外ならなかつたのである。高祖大師の理想は、單に自己一身の開悟に止まることなく、國家國民の淨化と一致すべきものであつて、鎮護國家こそは真言宗旨の最後の目的であられたのである。

されば真言行者は須らく高祖大師の嘉蹤芳躅を顧み、朝夕に鎮護國家の祈念を怠らざると共に、所謂十六大菩薩の自證化他の功德を現世一生の中に成就すべく、金剛

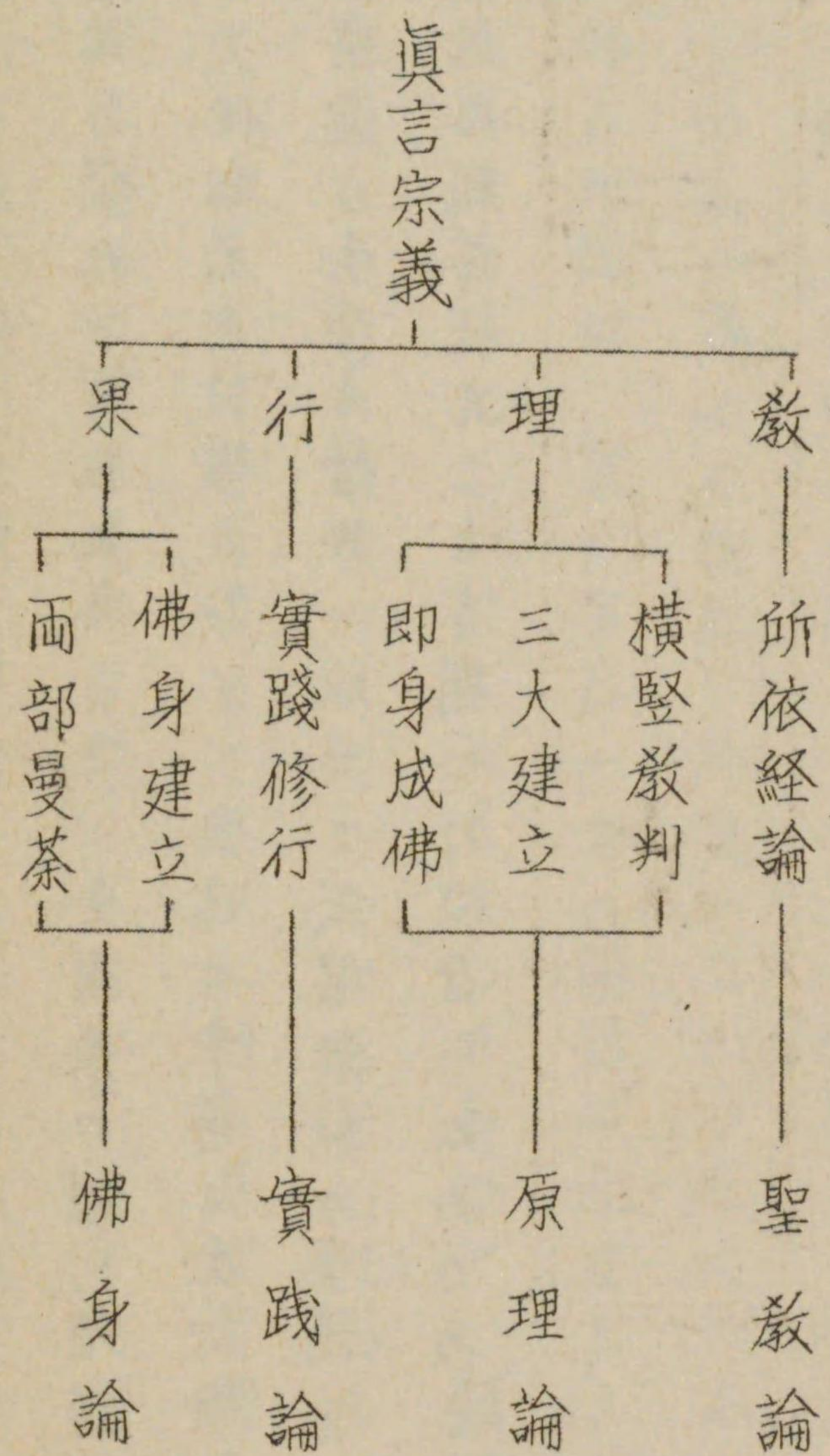
堅固の大菩提心に住し、絶えずこの心に刺戟せられて、福德を聚め、智能を啓らき、全國家の福利増進、全國民の文化向上を目標として、自己の本務に全心身を投じて大精進の生活を營み、以つて天壤無窮の皇運を扶翼し、四恩に報答せんことを期せねばならぬのである。



眞言付法傳

第十章 宗義 概括

以上眞言宗の綱要を説明し終る。今其の叙述する所の宗義を概括すると次の如くである。





### 真言付法傳

第一高祖號曰常住三世淨妙法身法界體性智摩訶毗盧遮那  
如來也。金剛頂經說。是薄伽梵遍照如來。以五智所成四種法  
身。於本有金剛界自在大三昧耶。自覺本初大菩提心。普賢滿月  
不壞金剛。光明心殿中。與自性所成眷屬。金剛手等十六大菩薩。  
及四攝行天女使。金剛內外八供養金剛天女使。十佛刹微塵數  
乃至不可說不可說微細法身。秘密心地。超過十地身語心金剛  
自受法樂故。各各說自所證聖智境界三摩地法。楞伽所謂法佛  
說法者離心相應體故。內證聖行境界故。大惠是名法佛說法之  
相者是也。如是法身智身二種色相。平等平等遍滿遍滿。一切衆  
生界一切非情界。常恆演說真實語。如義語。曼荼羅法教。卽是楞



伽所謂眞實說法者是也。般若論曰應化非眞佛亦非說法者。蓋  
爲此乎。應化佛報佛法性佛所說教法各不同故。金剛頂瑜伽  
經說如來變化身於閻浮提摩竭陀國菩提道場成等正覺。爲地  
前菩薩聲聞緣覺凡夫說三乘教法。或依他意趣說。或依自意趣  
說。種種根器種種方便如法修行得人天果報。或得三乘解脫果。  
或進或退於無上菩提三無數大劫修行勤苦方得成佛。王宮生  
雙樹滅遺身舍利。起塔供養。感受人天勝妙果報。及涅槃因。是明  
如來說不同報身毗盧遮那於色界頂第四禪阿迦尼吒天宮。雲  
集盡虛空遍法界一切諸佛十地滿足諸大菩薩證明。警覺身心  
頓證無上菩提。此顯報身佛自受用佛從心流出無量菩薩皆同  
一性。謂金剛性。對遍照如來受灌頂職位。彼等菩薩各說三密門  
以獻毗盧遮那及一切如來。便請加持教勅。毗盧遮那佛言汝等

將來於無量世界爲最上乘者。令得現生世出世間悉地成就。彼  
諸菩薩受如來勅已。頂禮佛足圍遶毗盧遮那佛。已各還本方本  
位。成爲五輪持本標幟。若見若聞若入輪壇。能斷有情五趣輪轉  
生死業郭。此表自受用佛及自此法性身所說法教。是名秘密眞  
言藏。卽是一切如來秘奧之教。自覺聖智修證法門。亦是菩薩具  
足受淨戒無量威儀。入一切如來海會壇受菩薩職位。超過三界  
受佛教勅三摩地門。具是因緣頓集功德廣大智慧。於無上菩提  
皆不退轉。離諸天魔一切煩惱及諸罪障。念念消融證佛四種身。  
謂自性身受用身變化身等流身。滿足五智三十七尊。不共佛法  
門。大日如來普遍常恒。雖演說如是唯一金剛秘密最上佛乘大  
勇荼羅法教。而非後非時不得聽聞信受修行流傳。必待其人必  
得其時。誰能弘者。則有七箇大阿闍梨耶。上自大日如來至青龍



阿闍梨。嫡嫡相續。迄今不絕。斯則如來加持力之所致也。

第二傳法祖。嚩日嚩薩。怛嚩摩訶薩。怛嚩唐云金剛薩摩訶薩唐云金剛薩。金剛頂經

說。是金剛薩埵親對法身如來海會。受灌頂職位。則說自證三密

門。以獻毗盧遮那及一切如來。便請加持教勅。毗盧遮那如來言。

汝等將來於無量世界為最上乘者。令得現生世出世間悉地成

就。是故持五智之金剛振般若之鈴鐸。驚長眠三有受法樂十方

遂乃釋迦如來掩化之後八百年中。灌頂龍猛傳受秘法。其後印

度支那及與日本。三密之教師傳授。拔濟群生。

第三祖名曰那伽闍刺樹那菩提薩埵。唐言龍猛菩薩舊云龍樹。誕迹南天化

被五印。尋本則遍覆初生如來。現迹則位登初地。初者本初地。謂心地。或遊

邪林而同塵同事。或建正幢以宣揚佛威。作千部論摧邪顯正。上

遊四王自在處。下入海中龍宮。誦持所有一切法門。遂乃入南天

鐵塔中親授金剛薩埵灌頂。誦持秘密最上曼荼羅教流傳人間。

楞伽摩耶等經如來所懸記。則是人也。彼楞伽經說。我乘內證智。

妄覺非境界。如來滅世後。未來當有人。於南大國中。有大德比丘。

名龍樹菩薩。能破有無見。為人說我乘。大乘無上法。出現八百年

住壽三百歲。傳顯弟子提婆居首。秘密法化龍智入室。師資傳燈

于今不絕。諸宗始祖。蓋此一人歟。

第四祖號曰龍智菩薩。亦名普賢阿闍梨耶。即龍猛菩薩付法之上足也。位

登聖地神方難思。德被五天名熏十方。上天入地無尋自由。或住

南天竺弘法利人。或遊師子國勸接有緣。故玄特三藏行狀云。南

天竺磔迦國菴羅林中。有一長命婆羅門。年七百餘歲。觀其面兒

可稱卅許。明中百論等。云龍猛菩薩弟子。法師就停學中百論等及

受諸經等。又貞元錄云。龍樹菩薩弟子名龍智。年七百餘歲。



今猶見在南天竺國傳授金剛頂瑜伽經及毗盧遮那惣持陀羅  
尼法門五部灌頂諸佛秘密之藏及諸大乘經論等又大辨正三  
藏表制集曰昔毗盧遮那佛以瑜伽無上秘密寂大乘教傳於金  
剛薩埵金剛薩埵數百歲方得龍猛菩薩而傳授焉龍猛又數百  
歲乃傳龍智阿闍梨龍智又數百歲傳金剛智阿闍梨及不空阿  
闍梨貪道大唐貞元十二年於長安禮泉寺聞般若三藏及牟尼  
室利三藏南天婆羅門等說是龍智阿闍梨今見在南天竺國傳  
授秘密法等

第五祖名跋曰囉胃地

唐云金剛智

南印度摩賴耶國婆羅門種誕育

靈奇幼有神異懇請於父求之入道年甫十歲於那爛陀寺依寂  
靜智出家學聲明論十五學法稱論二十受具戒六年學大小乘  
律又學般若燈論百論十二門論二十八就勝賢論師學瑜伽論

唯識論辨中邊論經三年卅一往南天竺於龍樹菩薩弟子名龍  
智年七百餘歲今猶見在經七年承事供養受學金剛頂瑜伽經  
及毗盧遮那惣持陀羅尼法門諸大乘經典并五明論受五部灌  
頂諸佛秘密之藏無不通達兼解九十四書尤工秘術妙閑粉繪  
每至飲食天厨自陳金剛薩埵常現於前觀音菩薩應現而作是  
言汝之所學今已成就可往大唐國禮謁文殊師利菩薩彼國於  
汝有緣宜往傳教濟度群生承是聖告遂入大唐開元八年初到  
東都所有事意一一奏聞奉勅處分使令安置四事供養於是廣  
弘秘教建鬘茶羅依法作成皆感靈瑞沙門一行欽斯秘法敷就  
諮詢和尚一一指陳後爲立壇灌頂一行敬受此法請譯流通卽  
翻譯瑜伽念誦法四卷七俱胘經等廿九年八月十五日於東都  
薦福寺遷化至天寶二年二月七日有勅於奉光寺西崗起塔安



置和尚從捨家入道至觀牛證滅所有應驗觸途繁多如別  
代宗馭曆錫證官號其制曰勅不空三藏和尚金剛三藏天  
異氣稟冲和識洞四生心依六度爰自西域杖錫東來以梵行因  
身慈心濟物覺華外照智炬內明汲引群迷證通圓寂密傳法印  
示隱涅槃衣鉢空存音徽長往教能垂後禮有飭終宜旌美名俾  
叶榮贈可贈開府儀同三司仍贈號大弘教三藏開府儀同三司者一品也

永泰元年十一月一日

第六祖大唐特進試鴻臚卿加開府儀同三司封肅國公食邑三  
千戶贈司空諡大辯正廣智不空三藏和尚者南天竺國人也法  
諱智藏號大廣智不空金剛故南天竺阿闍梨金剛智之法化也  
昔毗盧遮那佛以瑜伽無上秘密大乘教傳於金剛薩埵金  
剛薩埵數百歲方得龍猛菩薩而傳授焉龍猛又數百歲乃傳龍

智阿闍梨龍智又數百歲傳金剛智阿闍梨金剛智振錫東來傳  
於和尚自法身如來至于和上傳此道者六人而已矣和尚童孺  
出家聰明卓異服勤精苦晝夜不息經耳聞目咸誦無遺聞一知  
十若有神智先師歎言吾道東矣先師既歿和尚遂泛海遊南天  
竺師子等國詣龍智阿闍梨許更得瑜伽十八會法五部沙藏三  
乘遺典其不究其精奧焉貌與人同而心與佛齊矣天寶初歸至  
上都玄宗深敬遇之遂為三代國師出入禁闥聖上每延至內殿  
順風請益玄言啓沃宗仰日深大曆九年示疾而臥詔使結轍侍  
鑿嘗藥無虛日焉恩旨就臥加開府儀同三司依前試鴻臚卿封  
肅國公食邑三千戶累讓不克至六月十五日忽沐浴蘭湯換潔  
衣服抗表辭主奄然而化春秋七十矣夏臘五十矣聖上追痛廢  
朝三日和尚所居寺有荷池周迴數十畝旁無灌注中湧宣泉醴



甘鏡清冬夏常滿。及和尚遷化之日。池水先夕而涸。與夫雙林變  
白事異而感同矣。夫法體堅固無來無去。應俗緣則現於人世。證  
道品則歸於涅槃。豈常情之所能測乎。贊曰

天子灌頂。阿遮梨耶。道傳上國。家本耆闍。其望如龍。  
其人如玉。貝多在手。梵字假矚。心同皓月。光映碧池。  
蟬脫而去。麟臺畫之。三密寂寥。九重哀悼。笳簫駟馬。  
皆承明詔。萬里雲慘。千山松悲。蒼蒼何忍。奪我宗師。  
瞻雪顏則。無示無說。傳法浩劫。斯焉取斯。

第七祖法諱惠果。俗姓馬氏。京兆昭應人也。故大興善寺大廣智  
不空三藏之付法也。髻亂之日。隨大昭禪師見三藏。三藏乍見驚  
曰。此兒有密藏器。稱歎不已。汝必當興我法。撫之育之不異父母。  
即授三昧耶佛戒。許之受職灌頂位。口授大佛頂大隨求。及梵本

金剛頂瑜伽經并大日經等。和尚稟氣冲和精神爽利。均顏回之  
知十同項託之詰孔。年甫十五稍得靈驗。代宗皇帝聞之。追入命  
之曰。朕有疑滯願爲解之。和尚加持童子鈎召大自在天。法力不  
思議故。即遍入童子。皇帝一一問之。天即隨答。委說三世幽事。帝  
皇曆數。皇帝歎曰。龍子雖少能起雲雨。釋子雖幼法力降天。入瓶  
小師於今見矣。從爾已後飛龍迎送。四事優給。年登弱冠進之具  
足。四分兼誦三藏該通。金剛頂五部大曼荼羅法。及大悲胎藏三  
密法門。真言密契悉蒙師授。即授兩部大法阿闍梨位。毗盧遮那  
根本最極傳法密印。三藏告曰。吾百年後汝持此兩部大法護持  
佛法。擁護國家利樂有情。此大法者五天竺國太難得見。一尊一  
部不易得。何況兩部乎。所有弟子其數雖多。或得一尊。或授一部。  
愍汝聰利精勤。許以兩部。努力精進。報吾恩也。是故三藏遺書云。



吾當代灌頂廿餘年。入壇授法弟子頗多。五部琢磨成立八箇。淪  
亡相次。唯有六人其誰得之。則有金閣舍光。新羅惠超。青龍惠果。  
崇福寺惠朗。保壽寺元曉。覺超。後學有疑。汝等開示。法燈不絕。以  
報吾恩。賴此印可。三朝師尊。四衆依學。出入金殿。奉對紫極。敷演  
秘法。宣布妙理。四十餘載矣。常謂門人曰。金剛界大悲胎藏兩部  
大教者。諸佛秘藏。卽身成佛之徑路也。普願流傳法界。度脫有情。  
訶陵辨弘。新羅慧日。並授胎藏師位。劔南惟上。河北義圓。授金剛  
界大法。義明供奉。亦授兩部阿闍梨法。今有日本沙門空海來求  
秘教。授以兩部秘奧。壇儀印契。漢梵無差。悉受於心。猶如瀉瓶。此  
是六人堪傳吾法燈。吾願足矣。日出月沒。油盡燈滅。物之常也。菩  
薩不往。如來亦滅。吾亦庶幾不如歸真。卽以永貞元年十二月十  
五日五更去世。春秋六十。法夏四十。一人哀慟。四衆感絕。所有行

狀具如別傳

沙門輸波迦羅。具足梵音。應云成婆揭羅僧訶。唐音正翻云淨師  
子。以義譯之名。善無畏。中印度摩伽陀國王也。亦是龍智菩薩弟  
子。金剛三藏之同門也。捨寶位入道林。神氣清虛。道業恢著。精通  
禪惠。妙達摠持三藏。教門一心遊入。五天諸國。久播芳名。大悲利  
生。有緣東漸。途至北印度。境響震摩訶支那。皇帝搜集賢良。發使  
迎接。以開元四年景辰。大費梵夾。來達長安。初於興福寺南院安  
置。次後五年丁巳。於菩提院譯虛空藏求聞持法一卷。十二年隨  
駕入洛。於大福光寺安置。遂爲沙門一行。譯大日經一部七卷。蘇  
婆呼蘇悉地兩部經。三藏性愛恬簡。靜慮恬神。時開禪觀。獎勸初  
學。慈悲作念。接誘無虧。人或問疑。剖折無滯。弘仁十二年九月

七日



沙門一行。俗姓張名遂。亦是故金剛智三藏之法化也。邠國襄公  
謹之曾孫太僕丞懷之子也。家代忠孝公卿相襲。母隴西李氏。華  
容止性聰敏。懷孕之日。其母額上有二三寸白光。及生之後。移在  
兒額。親族怪而異之。至年十歲。聰慧過人。其父欲神童舉之。其母  
曰。吾夢寐徵兆。此兒必爲國師。勿妄舉之。後必成大器。於此乃止。  
其後遂爲國師。果如母言。掩化之日。玄宗皇帝自親製碑銘。并書  
石上。其詞曰

禪師幼而希言。言必有中。長無暇日。日誦萬文。深道極陰陽之奧。  
屬辭盡春秋之美。射策甲科。繼飛高蹈。依嵩嶽僧寂深究禪門。就  
常陽僧真纂成律藏。予聞玄德遠請來儀。展宿緣之冥愛。全幽人  
之繫履。禪師以朕欽若昊天。故撰開元之曆。以朕敦崇聖道。故述  
大衍之贊。又於金剛三藏學陀羅尼秘印。登前佛壇受法王寶。又

於無畏三藏譯盧遮那佛經。開後佛國滿大慈願。本孰爲而來哉。  
將辨是而去矣。善乎爲親出家。毀形無我。以拔濟幽難。是孝中又  
有孝也。爲君思道吐血忘倦。以潤色鴻業。是忠外別有忠也。昔嘗  
順風咨度。乘日遊閑。發揮精至。討論典禮。方期永喜。以親有德。天  
孤善願。奪我師賓。十五年前九月於華嚴寺疾亟。將舉病入辭。少  
間而止。朕於此夜夢。瞰禪居。見繩狀施轅紙隔開扉。曉而驗問。一  
如所覩。意識往來若斯。惑會先集都城名德爲禪師。說大道場。佛  
心證明危疾果愈。十月八日隨行所在新豐。身無諸患。口無一語。  
忽然浴者水換潔衣。趺坐正念。恬如寂滅。四衆瞻悼。久方覺知。適  
爾爲者有往生之意也。乃命停神於罔極之寺。安塔於銅人之原。  
諡曰大慧禪師。崇稱首也。自終及葬。凡經三十。爪甲不變。鬢髮更  
長。形共力持。色與心涵。十方億衆。贊仰希有。唯當蓮葉下生。觀多



寶於涌塔龍華後會禮迦葉於開山。予懷鬱陶寄詞糟粕。偈曰

自天聰明	經佛授記	彼上人者	兼善藝事	文揚日月
術窮天地	捨有作心	發無上志	萬品道諦	千門法華
惚攝一燈	撥去三車	我夢金人	來鎮國家	祚增劫石
善集恒沙	定住實相	慧行真宰	導予一人	化清四海
正眼何促	供心莫待	交臂忽亡	結跏如在	舍利堅固
法螺闕絕	見生滅者	寂豈生滅	聞言說者	空何言說
道離見聞	銘示來哲			

夫對揚如來文殊居上。發揮宣父顏回當之。扣壚真言禪師之功也。然大辨若訥大智若愚。非聖君無以鑒其賢。非智母莫以知其子。每憂國家亡絕佛法。諫下和敬隱德藏名。故多勝行闕而無述也。弘仁十二年九月六日書

真言付法藏書 終

為弘法大師千百年御遠忌記念騰寫

末資 久保 埜 太 運



真言宗綱要正誤表

八 八	八 八	六 九	五 五	三 五	三 四	二 八	二 二	一 六	八 六	八 三	頁 行
終	六	三	五	五	八	一	六	六	六	三	行
修 田	修 田	選 述	觀 修	三 輪	材 卷	觀	觀 修	僧 上	若 且	洋 一	誤
種 因	種 因	撰 述	勸 修	三 論	戰 譽	勸	勸 修	僧 正	若 具	洋 二	正
一 六 三	一 六 一	一 四 四	一 四 一	一 三 二	一 一 五	一 一 四	一 一 一	一 〇 七	九 六	九 三	頁 行
二	八	五	一	九	一	六	二	二	一	四	行
具	<i>gudha</i>	<i>gansa</i>	辨 駁	姪 食	<i>ain</i>	法 界	大 槃	( <i>ni</i> )	選 述	躰 性 五 大	誤
具	<i>gudha</i>	<i>gasha</i>	辯 駁	姪 食	<i>oin</i>	法 界	大 般	( <i>ni</i> )	撰 述	躰 性 五 大	正

五、内外中新











62  
33



636  
331



